

家庭叢書
第壹篇 聖母マリアの七の悲傷

再版



261
458

特 62
86



家庭叢書
第壹篇 聖母マリアの七の悲傷

再

版

43. 8. 8

Imprimerie Saint-Joseph, Osaka

長崎司教認可

はじりま

(1) 良書は精神の滋養物である、滋養物の缺乏は直に精神の衰弱を來す、近來吾公教界に、滋養物の供給が餘程豊になつてきたのは、喜ばしい現象である、唯婦人小童の貧弱な胃では、悉く之を消化し得ないのが残念である、夫れ鶏は金剛石よりも大麥を貴重ぶ、味は兎も角、消化し易いのをとは彼等の叫聲である、不味とは萬々承知しながら、本叢書の刊行を思ひ立つたのは、此叫聲に應ずる爲である。

(2)

本叢書は主として聖アルホンソの修養全書中より適當
なるものを譯出して埋める考である、ア氏は十八世紀の有名
なる大聖人、大神學家で、著書頗る多い、殊に其修養全
書の如きは平易通俗、小理窟が少くして滋養たつぷり、今
尙東西到る所に愛讀される、家庭の讀物には實に詭向で
ある。

本篇は長崎神學校の某氏が、ア氏の「マリアの光榮」
中より、流麗なる文語躰に摘譯したのを、自分が口語躰
に書き直したのである、譯文は通俗を旨として、必ずし

も原文に拘泥して居ない、思ひ切つて改作した處さへあ
る、省略した處なんぞは随分多い、是れ譯者の目的が原
文の倂を傳へるのでなくて、唯聖母の御悲傷をなるだけ
平易く寫出さうと云ふのであつたからだ。

本篇の出版に際して、靈父松川涼師が丁寧な校閲の勞
を執られた、茲に特記して其好意を謝す。

明治四十三年二月

譯

者誌す

(3)

追而、再版の序に、聖アルホンソの御苦難の默想

(4)

を一週間分附録として、添へることにした。



目次

(1)

緒論	殉教者の元后	一頁
第一の悲傷	シメオンの豫言	三十頁
第二の悲傷	耶穌埃及に落ち行き給ふ	四十四頁
第三の悲傷	耶穌を見失ひ給ふ	五十七頁
第四の悲傷	カルワリオの途上で耶穌に 行遇ひ給ふ	七十二頁
第五の悲傷	耶穌十字架の上に死し給ふ	八十七頁
第六の悲傷	耶穌十字架より下され給ふ	百三頁
第七の悲傷	耶穌御墓に葬られ給ふ	百十九頁

(2)

附録 耶穌基督の御苦難の默想

日曜日 御苦難の中に顯はれたる天主の愛 百三十三頁

月曜日 ゲツマニアの血の汗 百四十二頁

火曜日 耶穌捕はれ給ふ 百四十九頁

水曜日 耶穌鞭たれ給ふ 百五十五頁

木曜日 耶穌茨を冠せられ給ふ 百六十二頁

金曜日 耶穌十字架を擔ひ給ふ 百六十九頁

土曜日 耶穌十字架の上に死し給ふ 百七十六頁

目次終

(1)

家庭叢書 聖母マリアの七の悲傷 第壹篇

緒論 殉教者の元后

嘗て一人の家柄貴く素性正しき婦人があつて、世にも稀なる獅子を有つて居た。此子は、すべて人の子に願はしい美質美德をば悉くろの身に集めて、清淨かなる其心は露ばかりも罪の汚れた染せず、優美しくて高尚い其容姿は、谷間の百合の様に又なかくの親孝行で、

一たびも母の意に違つたことなきのみならず、たとひ海

(2)

は洩れ、山は崩るゝ時ありとも、此子が孝愛の道に缺ぐ
ることはあるまいと見わた居た、されば母君も、斯子を
何よりの寶、こよなき慰藉と愛でいつくしんで居たので
ある。

然るに月に村雲の隙に漏れず、さしも可愛い獨子は、
仇人の妬によりて訴へられ、判事は、其が聊かの罪もな
いとは十分に自分も知り、人にも公言しながら、告訴人
等の感情を害ふを恐れて、其請のまゝに、彼に對してい
と耻かしい死刑の宣告を下した、天にも地にも換へがた

き此獨子が、不正極る裁判の下に敵の手に渡され、思ふ
が儘に苦められ、打叩かれ、劈かれ、鮮血は流れて川をな
し、果ては花盛の身を刑臺の上に晒すのを、面に眺め視
る母の悲傷は如何許であつたらう。

かゝる無惨の死を遂げたる獨子とは、言ふ迄もなく吾
等の主耶蘇であつて、可憐なる貴婦人とは、即ち其母君
童貞聖マリアである、マリアは人類の不幸を憫むの情に
堪へず、其最愛の獨子を献げて神の御前に犠牲となし、
涙ながらに其痛ましい最後を眺め給ふのであつた、さて

(3)

(4)

もマリアの御仁愛の難有さよ、吾等は何を以て此大恩に
酬ゆることが出来やう、たゞ吾等の爲に嘗められた御悲
傷の程を思ひやつて、同情の涙を濺ぐより他ないのであ
る。

聖會はマリアを呼んで、殉教者の元后と稱へる、是れ
マリアの凌がれた苦痛、悲傷が、他の諸の殉教者のに比
べて、遙に長久くもあり、激烈くもあり、又些少の慰藉
も混入して居なかつたからである。

一 マリアの悲傷は長久かつた

諸の殉教者に勝りて激烈しい苦痛を凌がれたから、主
耶穌を苦痛の君、殉教者の王と稱へるならば、御子に次
いで最も甚大しい悲傷を凌がれたマリアを、殉教者の元
后と申し奉るのは當然であらう。

夫れ殉教者の尊稱を得るが爲には、必ずしも其身が死
する必要はない、死する程しの苦痛をさへ堪へ忍んだも
のけ皆な殉教者である、使徒聖ヨハネは煮ねかへる油釜
に投げこまれて、死ななかつたのみか、却て前よりも壯
健になつて出てきたけれども、やはり殉教者と尊ばれて

(5)

居る。

今聖母は、躰こり刑吏の斧に斫られなかつたが、御子の苦痛を痛はつて、其心は千たび死ぬるよりも堪へ難い 悲傷の刃で刺し貫かれたのである、随てマリアは殉教者であるのみならず、マリアの悲傷は、他の殉教者の比べて遙に長く、其一生は謂はゞ長い臨終の苦悶であつたから、殉教者の上の殉教者、殉教者の元后とも申すこと出来るのは明白である。

抑も主耶蘇の御苦難は、ベトレヘムの厩に始まつて十

十字架の上に終つたが、聖母の御悲傷も、一生の長に亘つて絶ゆる間とてなかつたのである、福者アルベルトの解釋によると、マリアといふ名は色々な意味を有つて居るが、「苦い海洋」の義も有る、善く當つた名と云はねばならぬ、海洋の真潮の鹹く苦いやうに、救主の御苦難を絶えず思ひやつて忘れさらなかつたマリアの一生は、實にせち辛い一生ではなかつたらうか、思ふに、マリアは豫言者等よりも、幾倍強く聖靈の光明に照されて居たから、救主にかゝる豫言も、之を記した豫言者等よりも幾倍明

(8)

に悟つて居たに違ない、マリアは幼少の頃より聖書を繙
 き見て、神が人類の救贖の爲に、人骸を受け、苦み給ふ
 べきことを思つて、其小き胸を千々に碎き、吾が身が其
 母となるべきことは、また夢にも知らない中から、罪人
 の爲に犠牲となつて、無惨かなる死を遂げ給ふべき救主
 を憫がつて、悲嘆の涙に暮れ給ふのであつた。
 自分が親しく救主の母となるに及んで、其悲傷愈激
 しくなつてきた、其可愛い御子の凌ぎ給ふべき御苦難は
 絶えず眼前に立ち顯はれて、いひ知らぬ悲傷を覺ゆさし

(9)

たのである、聖母は嘗て羅馬の聖母堂に於て、シメオン
 を従へて、ピルシツタ聖女に顯はれ給ふた、生血の滴る
 極めて長い劍を携へた一位の天使が其側に立つて居た、
 斯劍こそ、聖母の聖心を貫き破つた悲傷が、極めて長く、
 又激しかつたのを暗示したのである、さればシメオンの
 豫言した悲傷の劍と云ふは、たゞ耶蘇が聖母の眼前で、
 無惨な最後を遂げられた時ばかりでない、實に一生の間、
 聖母の汚れなき御胸を貫いて居たのである、御子に乳房
 を哺せ給ふ時、御腕に抱き締め給ふ時など、其痛ましい

十字架の刑が幻の様に心に浮み出て、聖母の御胸をかき破つたこと幾度であつたらう。

御子御昇天の後迄も、涙の谷に残された聖母は、過ぎにし御子の御苦難を想ひ廻して、寝ても起ても忘るゝこと出来なかつた、聖母は實に盡させぬ悲傷の中に辛き一生を送られた、悲傷と苦痛との外には、其心を飽せるものも無かつたのである。

世の常に悲傷や苦痛は、月日を重ぬるに随つて次第々々に薄らぐものであるが、聖母の悲傷だけは然うでなか

つた、耶穌が成長して、容姿の愈美しう愛らしうなるにつれて、其無惨な御死去の時が愈近まるのを思つて、マリアの悲傷は却つてますます激甚しうなる許であつた。マリアころ、誠に彼の荆棘の中に生れたる百合であつた、百合が成長すると共に荆棘も繁に茂つて、之を刺し苦めるがごとく、聖母も月日を送るに随つて、悲傷の刺に益深く御胸を突き破られ給ふたのである。

二 マリアの悲傷は激甚しかつた

エレミヤ豫言者は、エルザレムの處女に向つて、「何に

譬へやうか汝の悲傷を、全く海洋のやうだ」と曰つたが、
 聖母の御悲傷も實に海洋のやうで、他の殉教者のに比べ
 て番に長久かつたばかりでない、亦なか／＼に激甚しか
 つたのである、セナの聖ベルナルドノは曰つた、「もし聖
 母の御悲傷を全世界の人々に分配けたものなら、皆な立
 るに斃れて了つたであらう」と。

何故聖母の御悲傷が左程激甚しかつたかと云ふに、他
 の殉教者は、たゞ其軀を苦められたばかりであるのに、

マリアはシメオンの豫言の如く其心を傷られ給ふたから

である、心の痛と軀の苦とは、天地も番ならざることを
 思はゞ、聖母の悲傷が他の殉教者の苦痛より、いかにど
 激甚しかつたかも悟ることが出来やう。

加之、他の殉教者は自分の生命を失ふだけであつたが、
 マリアは自分の生命よりも限なく貴い御子の生命を犠
 牲するのであつた、随つてマリアは、御子の玉軀に受け給
 へたほどの苦痛をば、自分の心に感へたのみならず、御子
 の苦痛を仰ぎ視ては、自分の身に之を凌ぐよりも一層辛
 かつたのである。

夫れ可愛い子の苦痛は、之を眺める母の苦痛でないか、
 されば鞭も、茨も釘も十字架も、其他耶蘇の尊い御肉躰
 を劈いた刑具は、一として聖母の御心を貫いて堪へ難い
 苦を覺ゆさせないものとは無かつた、實に聖ロレンシ
 オ、シウスチニアノも言つた如く、聖母の御心は御子の
 御苦難の曇なき明鏡であつた、唾にまれ、耻辱にまれ、
 打擲にまれ、創傷にまれ、皆なこゝに鮮かに映つた、謂
 はゞ耶蘇の御肉躰に負はされたる數限なき切創、打傷は
 みな一となつて、聖母の御胸に集つたやうなものである。

親は常に吾が身の苦痛よりも、吾が子の苦痛を猶痛ま
 しく感ずるものである、されば聖母が最愛の御子の苦み
 悶へ給ふを仰見て、自分が悶へ死ぬるより苦う覺ゆられ
 たのは、無理ならぬことと曰はねばならぬ。

三 マリアの悲傷には一の慰藉も混入して居な
 かつた

他の殉教者と雖も、身に苦痛を感じたは感じたに違ひ
 ないが、然し「主耶蘇の御爲だ」と云ふ一念に、身体之苦
 痛は却て心霊の快樂となつたのである、聖ウヰンセンシ

オの如き、拷問臺に縛り附けられ、鐵の熊手もて肉をかき抓られ、眞赤に焼けた金板の上に炙られながら、聊か苦ししい様子もなく、刑吏に向つて物語る有様は宛ら別人の如く、身に苦痛あるのも知らない風情であつた、聖ボニファシオは、身は寸々に斬裂かれ、爪々の間には竹の針を刺込まれ、口には鉛を溶かして注込まれても「耶穌基督の御爲に苦むことの難有さよ」と感謝の祈を捧げて止まなかつた、又聖ロレンシオは炙子の上に炙られながら、刑吏に向つて「もう半面焼けた、打返して徐ろに

味はれよ」と諧謔れた、天主の愛の熱に燃ゆ立つて居た彼等には、實に苦痛もなければ死もなかつたのである。斯の如く殉教者等は、主耶穌を愛すること篤ければ篤い程、責苦を感ずること輕かつた、救主の御苦難を思つたばかりでも、其心を慰めるに餘あつたのである、然るにマリアに在つては其れが丁度反對で、御子の苦悶は御母の悲傷の原因、御子に對する愛情は御母の心を突き破る刑吏であつた、他の殉教者の爲に、苦痛を慰め傷を癒して呉れた耶穌の愛が、聖母を最も苦めた刑吏であつた

とすれば、聖母は誰に向つて其慰を求め、誰によつて其傷を癒して貰ふことが出来たらう。

凡て殉教者の肖像には、其責められた刑具が添へられてある、例へば聖ポロは刀を携へて居る、聖アンデレアは十字架を抱いて居る、聖ロレンシオの足下には炙子が置いてある、然るに殉教者の元后たる聖マリアだけは、御子の冷い死躰を抱いたまゝ描かれて居なさる、是れ聖母の致命の刑具は、刀でもなければ十字架でもない、最愛の御獨子であつたと云ふことを表したものでないか。

之を愛すること愈深ければ、之に離るゝ時の悲も亦愈甚しい、故に兄弟の死は友人の死よりも悲しく、子に先立たれた親の悲は、兄弟に死なれたよりも更に甚しいものである、今、子にして耶蘇の如く愛らしいものもなければ、母にして聖母の如く其子を慈しむものもない、其れに、其美しい愛に結ばれた母子の間を強ひて裂かれた聖母の心は、誠に如何ばかりであつたらう、聖母の御悲傷には、慰藉の露の一滴でも混入して居なかつたと云ふのは之が爲である。

さて、聖母は何の爲に斯く迄苦み惱み給ふたのであらうか、吾等人類の救贖の爲めには、神なる御子が磔けられ給ふので十分ではなかつたか、其母君まで共に苦まるゝ必要があつたのであらうか、イヤ必要があつたのではない、耶蘇の御死去は、此世界ごころか、千百の世界でも救つて餘あつたのだけれども、たゞ聖母が吾等を愛するの情に驅られて、吾等の爲に其御悲傷の功德を献げて、以て御子の人類救贖の大事業を協力やうと思召されたからである、されば吾等は、吾等の爲に苦んで、死んで

下さつた主耶蘇に負ふ所あるのみならず、吾等の爲めに御子の御死去を悲まれた聖母に對しても、負債があると云はねばならぬ、聖母は實に、吾等の靈魂を滅亡の途に打棄て置かんより、むしろ自分が有ゆる悲傷の淵に沈み入りたいと思召されたのである、故に其極みなき御悲傷の中に、もしや何等かの慰藉の這入るべき餘地があつたとすれば、其れは唯亡んで居た世界が耶蘇の御血によつて贖はれ、仇なる人類が、天主と和睦すること出來たのを思つてであつたらう。

マリアの吾等に對する御親切のかほせに深いのを見
 て、吾等も責めては其御悲傷のほどを同情つて、感謝の
 眞意を表さねばならぬ、然るに世には聖母の御悲傷を同
 情るものは極めて少い、多くは丸で忘れて了つて居る、
 聖母は嘗てピルツタ聖女に世の人の薄情なのを訴へ
 て、「吾れ世の中を見廻して視るに、吾が悲傷を思ひやつ
 て同情の涙を流して呉れるものは至つて少い、汝は責め
 て吾れを忘れず、吾が悲傷を觀想て、力の及ぶ限り吾れ
 と共に悲んで呉れよ」と申された。

猶又一千二百三十九年、聖母はイタリヤのフロレンス
 町に於て、後に聖母の下僕會を創立てた彼の有名なる七
 聖人に、黒い服を手にして顯はれ、「此墨染の喪服を着け
 て、屢々吾が悲傷を記念ひ出せ、記念ひ出しては之を黙
 想せよ」と誨へ給ふた、主耶蘇も亦ペロニカと云ふ聖女
 に告げて曰ふたことがある、「吾が苦難を悲んで、流して
 呉れる涙は嬉しいけれども、吾れは母君を限りなく愛す
 るからして、母君の吾が爲に凌がれた御悲傷を思ひやつ
 て、流して呉れる涙が猶更嬉しい」、終に主は、悲傷の聖

母を敬愛する人々に四の大恩を約束された、一「悲傷の御母に信頼むものには、死する前、真心より其罪を痛悔する恵を興へてやらう」、二「困難に臨み、魔鬼の誘惑に遇ふ時、殊に又臨終に際して、自分は特別に其人を保護して遣らう」、三「此世に於ては、其人の胸に自分の苦難の記憶を深く刻み込み後、天國に於て厚く酬を取らしてやらう」、四「其人の事は一切聖母の手に委して了ふ、すると聖母は、其欲する聖寵を必要に應じて求めて下さる、」何んと難有い御約束でないか、尙は次の例話を讀んで見

たら、悲傷の御母に對する敬虔が、いかほど救靈の爲に有益で有るかが解かる。

例話

聖女ピルツタの啓示録の中に記されたる實話がある、六十年の久しき、魔鬼の奴隷となつて、有ゆる罪惡に身を浸し、秘蹟一度拜領つたことない人が居た、重い病に臥さつて今はと云ふ頃、聖女は主耶穌の命により、聽罪司祭の許に往つて、「病人を見舞ひ、最後の勧誘を爲るやうに」と頼んだ、司祭は二度迄往つたけれども、二

度とも病人は、一告白なんか幾度もしたから今更告白する
 必要はない」と言張つて聽かない、憐なる罪人は、今や其
 長い一生の間に重ね重ねた罪惡を背負つて、終なき苦罰
 の淵に落ち行かんとして居るのである、主は愈不憫に思
 召され、「今一度往つて勸めて見るやうに司祭に頼め」と
 聖女に命せられた、司祭は病人の許に往つて、自分が三
 度迄來たのは主の御命令である、主が憐を與へてやらう
 と思召し給ふからである」と、聖女に告げられた所を委細
 物語つた、流石の罪人も夫には太く感動したと見ゆ、は

ら〜と涙を流し、言葉さへ改まつて、「然し私ごとき者
 が、どうして救かること出来ませう、誓つて魔鬼の奴隷と
 なつて、之に事へること爰に六十年、有ゆる罪惡に身を汚
 して今に到つたのでありますもの」と泣いた、司祭は之
 を勵まして曰ふ「眞心より痛悔さへすれば天主は必ず赦
 して下さる、夢にも疑ひなさるな、彼れ此言葉に力を得
 て「私は地獄に落ちるものと是迄失望して了つて、痛悔
 しやう、心を改めやうなんて思つたことさへ無かつたの
 に、今は痛悔の念がむら〜と發つてきた、あゝ天主は

私を捨て給はなかつた、告白します、直と告白します」
 と、痛悔の色は満面に溢れ、其日の中に四度までも告白
 し、翌日聖体を拜領し、心の底より悔み悲みつゝ、丁度
 六日目に眠るが如く息絶へた、主は重ねて聖女に顯はれ
 て「彼の罪人は救はれて今煉獄に居る、彼は平素罪惡の
 中に溺れて居ながらも、悲傷の御母を尊ぶ心を失はずし
 て、思ひ出す毎に同情の念を發して居たから、聖母の御
 傳達によりて救靈の恵を得たのである」と告げ給ふた。

祈 禱

嗚呼悲傷の御母にして、殉教者の元后なるマリアよ、
 御身は吾等の爲に死し給ひし御子を痛はりて悲嘆に沈ま
 せ給ふ、されど吾れもし救靈を得ずんば、御身の御悲嘆
 も何の益かあらん、願くは御悲傷の功德によりて、眞心
 より悔い悛むるの聖籠を吾が爲に請ひ求め、且つ吾れを
 して、絶えず御子の御苦難と御身の御悲傷とを思ひやり
 て、同情の涙を濺がしめ給へ。

嗚呼聖母よ、最愛の御子が御頭をうなだれて、十字架
 上に死し給ふを眺めし時の御悲傷を思ひ出し、何卒吾れ

に善き終を遂ぐるの恵を得せしめ給へ、いかに罪人の代
 願者なる聖母よ、吾が現世を去りて永遠に入らんとする
 時、吾が苦悶を憐みて來り援け給へ、又其時、吾が聲は
 嗔れ、吾が力は失せ、御身の御名も、耶蘇の御名も、唱
 ふることも能はざるかも計り難ければ、吾れは今より御子
 と御身とに依り頼み、「イエズス、マリアよ、吾が靈魂を
 御手に托す」と申し上げ奉る、アメン。

第一の悲傷

シメオンの豫言

現世を涙の谷とは善くも名けたもの哉、泣いて生れて
 泣いて死ぬる世の例とは云へ、貴さも賤さも、身にふり
 かよる涙の露に袂を絞らぬものこそないのである、況し
 て自分の行手に横つて居る千百の災禍を豫め知ること
 も出来たら、其れは如何に味氣ない涙の谷であらう
 か、セネカも曰つたでないか「行末を憂ふる者ほど哀れ
 なものはない、禍のまだ身に及ばぬさきから、身は既に
 禍を覺ゆる」と。

天主は吾等の虚弱いのを憐んで、吾等が行先いかなる

苦勞の重荷を背負はねばならぬかと、前以て知らせ給はぬ、たゞ之を肩にする時、一たび其重を感じさせ給ふのみであるが、マリアは對しては、さる情すらかけ給はぬのであつた、兼てよりマリアを以て悲傷の元后となし、事毎に其御子に似寄せやうとの思召であつたから、マリアの目の前には、絶えず其哀しい行末を歴然と描き出して、腹も断るゝ思に泣かしめ給ふた、マリアの哀しい行末とは、云ふ迄もなく其可愛い御子の御苦難御死去である。

思へば祓除の式の當日のことである、エルザレムの聖堂に於て、シメオンが御子を恭しく兩腕に抱へながら、喜悅の情に溢れて居る母君に打向ひ、御子が後日人々より浴せかけられ給ふべき反抗迫害を豫言して「斯兒は辨駁を來すべき目標となるであらう」と曰ひ、又マリアが其爲に嘗め盡さねばならぬ悲傷をも豫言して「將に劍ありて、御身の魂をさし透すであらう」と告げ申したの

は、實に聖母の御悲傷の始であつた。

聖母の總ての喜悅は、シメオンの斯語の爲に全く悲傷

に變り果てた、聖母は固より、最愛の御子が、世界人類の救贖の爲に犠牲にされ給ふべきことは、疾くに御承知の所であつたけれども、斯時はじめて、御子の凌ぎ給ふべき御苦難、御死去の悲惨しい有様を明に悟られたのである、即ち御子が天主の御獨子、人類の救主、天地萬物の大王に在しながら、人々よりは賤しい大工の子と輕しめられ、偽豫言者と嘲笑はれ、收税吏、罪人の徒に加へられ、神を瀆したと訴へられ、正式の裁判すら經ずして罰さるべき大罪人と見做され、終には頭の頂より足の爪

先まで、全身すきまもなく打碎かれ、鮮血に塗れ、凌辱に飽がされ、見るさへ忌々しき磔柱の上に御一命を果さるべきことなど、聖母は斯時より一々手に取る如く覺られたのである。

「生れた汝の子は死ぬであらう」どの豫言者ナタンの一言に、ダビド王は終夜悲み働いて、寝ることすら食べることすら得なかつた、マリアは御子の悲しい御死去の豫言を耳にしても、偏に天主の思召と諦めて、物狂はしげに泣き叫ぶこともなく、最後まで善く其御計に安んじ

給ふた、さりながら其可愛い御子を面に眺観るにつけ、其愛らしい唇より迸り出る聖言を聴くにつけ、其神々しき舉動を仰視るにつけ、母の心は如何に断るゝ心地がしたであらうか。

「イザアクを犠げよ」と云ふ天主の命を蒙つて、アブラハムが其最愛の獨子を伴つて、三日の旅行を爲した時ばかりは、實に堪へ難く覺わたのである、然しアブラハムの悲傷は三日を越へなかつた、マリアは三十三年の久しき、同様の悲傷を…否同様ならまだしも、耶穌がイザア

クより愛らしかつた丈け、其丈けアブラハムの悲傷より激しい悲傷をば忍ばれたのである。

聖母は御存命中、この悲傷の爲に始終胸もけり裂く様な心地がしたと云ふことを、親らビルジッタ聖女に告げて曰く「吾れ御子を眺むる毎に、布片に裏む毎に、御手足を視る度毎に、怖ろしい十字架の刑はあり〜と吾が眼前に立ち顯はれて、吾が心は絶わす新らしい悲傷に惱まされた」。

其も其筈である、御子が諸聖人の力でありながら、臨

終 苦悶に弱りはて、天國の華と歌はれる身であなりが
 ら、淺ましい姿に寔れ、天地の大王でありながら、大惡
 人の如く繩目に掛り、萬物の造主でありながら、滿身創
 を蒙つて腫れふさがり、無上の判事にして罪に定められ、
 王の王にして、茨を冠せられて嘲弄はれ給ふべきことな
 りと思ひ續けては、如何に健氣な聖母とはいへ、どうして
 胸も抉らるゝ思がしなないで居られやう。
 春雨のそぼふる朝、秋風の身に染む夕、御子の痛はし
 い行末を思つてマリアの心は破れやうとしたこと幾回で

あつたらう、御子は乳房を哺せる時は、其飲され給ふべ
 き酢と苦膽を想ひ、在床に搦める時は、其縛られ給ふべ
 き大綱小綱を想ひ廻らし、兩の腕に抱へては、其恐ろし
 い十字架の磔柱を想ひやり、其のすやくと眠り給ふ
 のを見ては、無慘なる御死去を想ひ浮べられたであらう、
 御衣を着更へさしては、刑吏等が手荒らかに引剝ぐ光景
 が面に顯れ、御手足を眺視ては、鐵釘あらしくしく十
 字架に打附くる惡黨輩の掛聲、其怖ろしい金槌の音が、
 手に取る如く耳に響いたに違ないのである。

福音書に「耶蘇年齢の進むに従ひ、智慧も進み、神と人との寵愛も俱に愈加つた」と記してある、常人にさへ日にまし敬ひ愛され給ふたと云ふならば、況して御母のマリアには、いかにばかり寵愛され給ふたであらうか、してこの慈愛深き母、愛情の、日に月に濃厚くなり行くに随つて、御子が何日かは悲惨しい刑に處はれ給ふであらうとの悲傷も、亦日に月に加つた、即ち御子の御苦難の節の愈近する程つ、メオンの豫言がさし込んだ悲傷の劍も愈深く聖母の御心に突入つてきたのである。

吾等の王たる耶蘇すら、其母君マリアすら、一生涯かほごに激しい苦痛を凌ぎ給ふたのに、吾等はとうして僅少ばかりの困厄を堪へ忍ばないで居られやう、昔し聖ドミニコ會の童貞女にマダレナ、オルシンとて、多年大々な試嘗に惱まされて居たのがあつた、キ耶蘇一日十字架に磔けられた儘顯れて、マダレナを勵まし、自分と共に十字架の上に止つて、氣強く堪へ忍ぶやうにと勧め給ふた、するとマダレナは涙ながらに「御身が十字架の上に苦み給ふたのは、九々三時間だけだつたに、私は幾年前

から茲に悶へて居ますもの」と呟いた、主は之を聞き答
 めて「愚なるもの哉、十字架の上で凌いだ苦痛、懊惱は、
 人骸を受けた其時より、自分は既に之を心に感じて居た
 のを知らないか」と答へ給ふた。吾等も禍殃に罹つて堪
 へ難く思ふ時には、耶穌とマリアとが吾等に向つて、同
 様の言葉を繰返し給ふと想像するが可い。

例話

耶穌會のロヴィグリオ靈父の傳へた實話がある、一人
 の青年、七の劍に胸を貫かれて居る悲傷の御母マリアの

聖像を毎日敬禮して居た、一夜不幸にして大罪を犯した、
 翌朝聖像の前に至つて見ると、七の劍は増して八となつ
 て居る、青年不思議に思つて、しばし打眺めて居ると、
 何處よりか聲がきこえた「八つ目の劍をマリアの御胸に
 突込んだのは汝の罪であるぞ」と、青年大に懼れ、忽ち
 痛悔して其罪を告白し、力ある聖母の御傳達によつて、
 再び天主の聖寵を回復したと云ふことである。

祈禱

慈愛深き御母マリアよ、吾れ數限なき罪もて、數限な

き劍を御胸に突立て奉れり、赦させ給へ、御身は罪なし、
 露ばかりも苦み給ふべきにあらず、數々の罪に汚れし吾
 が身ころ、有ゆる苦痛に打惱まざるべきにはあるなれ、
 されど御身は、吾が爲にかほどの苦痛を甘んじて堪へ忍
 び給ひたれば、希くは其苦痛の功力によりて、吾をして
 罪を痛く悔い悲ましめ、又現世の禍殃をも甘んじて堪へ
 忍ぶを得せしめ給へ、アメン。

第二の悲傷

耶蘇埃及に落ち行き給ふ

一たび丸を喰つた獸が、何處へ走つても其丸傷を負ふ
 て居る如く、聖母もシメオンの悲しい豫言を一たび耳に
 してより、御子の御苦難の哀け始終御身に附纏つて、片
 時も其痛を忘れること出来なかつた、耶蘇が愈年長け給
 ふにつれ、其愛らしさの益加はるに随つて、シメオンの
 豫言した悲傷も、いよゝ其意地悪い手をさし延して迫
 り來るのであつた。

吾等は今、耶蘇がヘロデ王に迫害められて、はるゝ
 埃及として落ち行かれた時、聖母の御心を貫いたる第二

の劍を謹んで黙想へ見やうとするのである。

猶太亞の王へロデは、救主の君の生れ給ふたと聞いて、
 眉を擡め、自分の王位を奪はれはすまいかと一方ならず
 胸をさわがせた、……御苦勞千萬である、今生れ給ふた
 君は、弓矢の威力もて世の王公を征服へるのでなく、不
 思議にも、己が生命を擲つて以て之を懐柔け給ふのであ
 るのに。

へロデは救主の在所を聞ききたゞして、直に之を亡きも
 のにしやうと、博士等の歸を今か〜と待つて居たに、

博士等が他の路より歸國したと聞くや大に怒り、ベトレ
 への邑を始め其附近の嬰兒を、たゞ一令の下に悉く屠
 り殺させた、ベトレへの城下、空吹く風も腥く、鳴き
 叫ぶ聲々は四方の境に響き渡つた。

其時早く、天使夢にヨセフに顯れて、「急に嬰兒と母と
 を連れて埃及に遁れよ」と命じた、ヨセフ取る物も取り
 敢ず、即夜暗に紛れてベトレへムを出で、辛うじて難を
 免れた。

あゝ誠に斯兒は辨駁を來すべき目標であつたか？ 昨日

ころ纒わづかに生れ落ちたに、今日は早はやや仇人あだびとに窘逐せめられて
 流石まさかに廣ひろき故郷ふるさとの地ちも身みを容いるゝに處ところなく、見みも知らぬ
 異國りこくの空そらに漂流さまよねばならぬいらしきよ。

聖母せいぼの一行いっかうは、道みちすがら如何いか程ほどの困難こんなんを嘗なめられたで
 あらうか、案内あんないも知らぬ道みちの山坂やまなか險けしく、砂漠すなはら遠とほく打連うちつら
 り、人ひとの往來ゆききさへ稀まれであるのに、頃ころしも冬ふゆの真中まなかのこと
 ではあるし、宛さなから針はりを裏つんだやうな寒風さむかぜは、砂すなを捲まき、
 雨あめを送おくり、霰あられを飛として、たゞさへ難澁なんじふな旅路たびぢを一入ひし難澁なんじふ
 ならしたであらう。

當時たうじマリアは御年おんどし僅わずかに十五じふご、荒あき風かぜに當あたつたこともな
 い小娘こむすめである上うへに、僕婢めしつかひと云いつてもあるではなし、自じ分ぶん
 で主婦あるじともなり、僕婢めしつかひともなつて、有あゆる艱難かんなんを嘗なめ盡つく
 し給たまふのであつた、哀あはれ、うら若い母ははの生うまれたばかりの
 嬰兒あやなこを懷よこころにして、霧きりを衝つき雲くもを分わけ行ゆく後姿うしろすがた、思おもひやる
 だけでも、熱あつい泪なみだがホロリと落おちる。

途中とちゆうは如何いかにして口くちを糊ねらし給たまふたであらうか、ヨゼフ
 の携たづへて居ゐたパンも日ひならホ食くひ盡つくすと、行ゆく々あはれ憐れみを乞こ
 ふて、僅わずかに飢うを忍しのばれたであらう。

夜は何處に明し給ふたであらうか、茫々として際涯なき砂漠には、一夜の宿を乞ふべき家とてもあらう筈がない、或は霜露に打たれて砂の上に臥し、或は樹の下蔭に眠り、時には盜賊の咎むる所となり、飢に叫ぶ野獸の聲に胸を躍らし給ふこともあつたらう。

埃及の地に入りて足を駐められたのは、マタレと云ふ邑であつたとも云へば、ヘリオリポスであつたとも云ふ、其漂流の月日も幾何であつたか、七ケ年と云ふもあり、一三ヶ月、或は二三週間に過ぎなかつたとも云もあつて、

確に憊うと定めることは出来ないが、其間に聖母夫婦の嘗められた困窮の哀は、心も言葉もなかくに及ぶ所でない、身は異國の空にさすらひて、知人なく、親戚なく、一錢の貯すらなかつたらうし、毎日額に汗して拭ぎ廻り、僅に其日くの露の命を繋ぎ止める位で、時には飢に細つた御子の小さい腹さへも飽かせること能はずに、空しく涙にかさくれ給ふこともあつたらう。

ヘロデが死ぬと、ヨセフは再び天使の命を受け、母子を伴つて猶太亞に歸つた、敵の恐怖こゝろないが、途中の

困難は少しも前に異なる所なかつたであらう。

耶蘇とマリアとは、斯く旅より旅へと漂泊ひ給ふた、

思へば、吾等も斯世に覺束ない旅路を辿つて居るので、

一度は必ず一切の事物に訣れて、永久の住所に歸らねば

ならぬ、どうして儂ない斯世の事物に露ばかりも心を奪

られて宜からう、斯世には永久の住所はない、たゞ未來

の住所に向つて、毎日／＼歩を進めつゝあるのである、

聖アウグスチンも曰つた如く、吾等は旅客である、觀め

ながら過ぎ行くのだと云ふことを忘れてはならぬ。

猶又、斯世は涙の谷であつて、十字架は片時も身を離

れないのだから、勇しく之を背負つて進むの覺悟が肝要

である、然し苦痛の中に在つて苦痛の重荷を感じまいと

思はゞ、耶蘇とマリアとを携へるに超したことはない、

「汝嬰兒と母とを連れて」と天使はヨセフに命じたでない

か、實に满腔の愛情を濺いで、耶蘇とマリアとを吾が心

に迎へ入れると、苦痛の重荷はよほど輕められる、否な

却て嬉しう、心地よく覺わるのである、然らば吾等は心

を傾けて耶蘇とマリアを愛しやう、世には今尙ほ罪を犯

して、ヘロデ見たやうに耶蘇を窘逐めるものが絶はないから、責めて吾等は心の門を開いて主をこゝに迎へ入れ、悲傷に沈んで居る聖母の御心を慰めて上げたいものである。

例話

聖母嘗て、聖フランシスコ會のコレツタ聖女に顯はれ之に嬰兒耶蘇が寸々にきり裂かれて居なざるのを示して、「罪人が吾が子を苦めるのは今でも此の通りである。彼等は毎日、吾が子を殺して吾が悲傷を新にする。汝

どうか彼等の改心を祈つて呉れよ」と仰せられた。又同會のヨハンナと云ふ童貞女、一日、耶蘇がヘロデに迫害られ給ふたことを黙想して居ると、俄に消魂しい物音が起つて、大勢で何物かを追廻す様子である、驚いて見やる途端に、一人の童子の邊りも輝くばかり美しいのが、息絶々に馳りきて、「助けて呉れ、はやう隠して呉れ、ナザレトの耶蘇であるぞ、私を殺さうと哮る罪人の手を遁れて來た、どうぞ助けて呉れよ」と申された。

祈禱

あゝマリアよ、世の人は御子を一たび十字架にかけ奉りしに飽き足らず、罪に罪を重ねて、夜晝御子を苦め、御身の御心を痛め奉るなり、思へば吾れもかゝる忘恩奴の一人なりき、いかに憐の御母よ、吾れをして此怖るべき罪を嘆き悲しませしめ給へ……御身が埃及にさすらひて、凌ぎ給ひし艱難苦勞によりて願ひ奉る、何卒、吾れにも此世の旅路を首尾能く辿り畢へしめ、榮福の御國に於て御身を仰視、又御子を一心に愛し奉るを得せしめ給へ、アメン。

第三の悲傷

イエスマス 耶蘇を見失ひ給ふ

使徒聖ヤコブは堪忍の徳を頌めて、「完全の業」と稱し「人をして圓滿に缺ぐる所なからしむる徳だ」と曰つて居る、天主はマリアを以て完徳の鏡となし、其類なき堪忍を吾等の眼前に掲げて、之に則らしめやうと思召してか、マリアの御一生の短くもない途筋には、困難、苦痛の刺怖ろしい荆棘を敷知れず横へ置かれた、中にもマリアを痛く惱ましたのは、御子をエルザレムに於て見失ひ給ふ

九時の悲傷であつた。

夫れ性來の盲者は、月日の光を仰がずとも、さして不自由を感じないが、暫くでも物を見、光を仰いだ人に在つては、盲目は悲しいものはない、浮世の砂塵に眼眩んで、まだ一たびも天主を認めれたこともない人は、天主を見なくても、格別、痛も痒も覺わまいが、一たび天の御光に照されて、天主をこよなき寶と認め、蜜のやうな愛情を傾けて、ろを抱き締めて居た人が、遽に之に離れるのは如何に胸はり裂くる心地がするであらう、されば

耶穌を産み上げてから以來、一日、片時がほども、身を離したことの無いマリアが、今やエルザレムに於て之を見失ひ、三日の間も之に離れた時ばかりは、實に血を吐く思がしたに違ないのである。

謹んで、聖福音書を繙き見れば、マリアは毎年バスカの大祝祭には、夫のヨゼフと共に、耶穌を携へて、エルザレムの聖殿に参詣し給ふのであつた、耶穌十二歳の時、例の如く参拜されたが、歸りしなに、耶穌は何とも言はずに、自分ひとりエルザレムに止り給ふた、聖母夫婦は

固よりかゝる事とは夢にも知らう筈がない、女の通る路
 と男の通る路とは別々になつて居たから、マリアの方で
 はヨゼフと一緒にだらうと思ひ、ヨゼフの方ではマリアと
 一緒だらうと思つて安心して居られたに、其日も行暮て
 夕陽が西の山の端にさし入る頃になつて、双方出逢つて
 見ると、何方にも居なさらぬ、親戚の人々に尋ねても、
 吾こり御子を見たと言ふものは居ない、二人は心も心な
 らず、直にエルザレムに引返し、夜を日に繼いで捜し索
 め、三日目にやうく聖殿の内で見出し給ふた。

さても斯三日の間、聖母の心煩は如何ばかりであつ
 たらう、家々人毎に御子の行方を尋ね廻つても、是ぞと
 思ふ手掛もなく、終には疲れくつて綿の様になつた軀を
 投げ出して、空しく悲嘆に沈み入られた、斯くて三日の
 間は、夜晝泣き明し泣き暮して、或は父の天主に向つて
 御子を返し給へと嘆願し、或は御子に向つて「汝の在所
 を告げ給へ」と一心不亂に祈られたであらう。
 抑も是迄の悲傷と云つても、容易ならぬ悲傷であつた
 に相違ないが、然しシメオンの豫言に胸を破られ給ふた

度があつて見限られたのではあるまいか」と色々其から
 其へと氣遣つて、愈悲嘆の涙に暮れ給ふのであつた。
 實に天主を愛する人にとつては、天主の御旨に戻りは
 しなかつたらうかとの憂懼はと堪へ難いものはない、さ
 れば如何なる悲傷の中にも、曾て些の不平でも漏したこ
 とないマリアが、御子を探ね當ると「何故こんな事を爲
 された、父も私もどれはと心配して探ね廻つたのに」と申
 されたのを見ても、其悲傷のほどを察することが出来る、
 聖母の此言葉は決して、異教の徒の妄言する如く、御子

を譴責められたものでない、たゞ懐しい御子を見失つた悲傷
 の、いかに甚大しかつたかを訴へ給ふたに過ぎないので
 ある。
 要するに、第三の悲傷はと聖母の御胸を痛めたのはな
 かつた、某の聖女、嘗て斯類なき悲傷を泌々覺りたいも
 のと、連りに聖母に願つたことがあつた、聖母は彼れの
 切なる願を容れ、御子を両腕に抱いて現はれ給ふた、聖
 女の喜譽ふるに物なく、茫然己れを忘れて其愛らしき嬰
 兒を眺め入つてる折しも、御現は忽焉消え失せた、聖女

時にせよ、埃及にさすらひて、云ふに云はれぬ艱難苦勞を嘗められた時にせよ、耶蘇と共にあつたから、苦しむ中にも多少の慰藉がないにも限らなかつた、然るに今度ばかりは、其最愛の耶蘇を見失ひ、其行方すら知るに由なく、自分獨で腸を千断り給ふのであつた、マリアはエレミア豫言者の如く、私を慰めて呉れるものは遠かつて了つた、私はたゞ泣きしをれて、兩眼の涙は宛然雨の様だ」と悲み、又トビアと共に「私はもう何の樂もない、暗黒になつて日の光をさへ仰視ること出来ないもの」と

嘆かれたであらう。

るればかりでない、他の悲傷に際しては、アマリは明に其理由を知つて居られた、即ち是れ皆な人類の救贖の爲に、天主の御手より降されたものだ、明に承知して居られた、然し御子を見失つたことだけは全く秘密で、何の故であるか知ること出来なかつた、謙遜深き聖母のことであれば、一敷ならぬ自分が永く救主の御側近く侍つて、御身のまはりを周旋するに堪へない爲ではなからうか……自分は今迄よく耶蘇に事へて居たが、何等かの落

度があつて見限られたのではあるまいか」と色々其から
其へと氣遣つて、愈悲嘆の涙に暮れ給ふのであつた。

實に天主を愛する人にとつては、天主の御旨に戻りは
しなかつたらうかとの憂懼はと堪へ難いものはない、さ
れば如何なる悲傷の中にも、曾て些の不平でも漏したこ
とないマリアが、御子を探ね當ると「何故こんな事を爲
れた、父も私もどれはと心配して探ね廻つたのに」と申
されたのを見ても、其悲傷のほどを察することが出来る、
聖母の此言葉は決して、異教の徒の妄言する如く、御子

を譴責めたものでない、たゞ懐しい御子を見失つた悲傷
の、いかに甚大しかつたかを訴へ給ふたに過ぎないので
ある。

要するに、第三の悲傷ほど聖母の御胸を痛めたのはな
かつた、某の聖女、嘗て斯類なき悲傷を泌々覺りたいも
のど、連りに聖母に願つたことがあつた、聖母は彼れの
切なる願を容れ、御子を両腕に抱いて現はれ給ふた、聖
女の喜譬ふるに物なく、茫然己れを忘れて其愛らしき嬰
兒を眺め入つてる折しも、御現は忽焉消え失せた、聖女

天てんに哭なげき地ちに悲かなしみ、生いきたる心こころ地ちもなかつたに、三日みっかの後のち、聖母せいぼは再またび現あらはれて、汝なんぢの感かんじた悲傷かなしみは、吾わが御子おんこを失うしなつた時ときの悲傷かなしみの千萬分せんまんぶんの一いちにも過すぎなかつたのに」と曰いつて、之これを慰なぐさめ給たまふた。

兼かねぐ、天主てんしゆに親したし居ゐたものが、俄にはかに従前これまでの如ごとく其その楽しい御愛情ごあいじやうを味あぢふこと叶かなはずに、憂愁うれひに沈しづんで居ゐる時ときなど、この第三だいさんの悲傷かなしみを思おもふと、少すくなからぬ慰安なぐさめを覺おぼゆるのである、かゝる人ひとは嘆なげかば嘆なげけ、たゞマリアの如ごとく心こころ靜しづかに嘆なげけ、是これあればとて、自分じぶんは天主てんしゆの聖寵せいちやうまでも失うしな

つたのでなからうかと心配しんぱいするには及およばぬ、靈魂れいこん上じやうに就つては、自みづから知しらずして亡ほろびる者ものもなければ、自みづから欲のぞまずして欺あざむかれる者ものもない、天主てんしゆは時ときとして自分じぶんを愛あいして呉くれる人ひとの目めに隠かくれ給たまふことはあるが、其心そのこころにまで遠とほざかり給たまふことはない、其時そのときとして吾等われらの目めに隠かくれ給たまふのは、吾等われらに一層いっそう熱あつい望のぞみ、前まへにも倍はひする烈はげしき愛あいとを以もつて探さがさせる爲ためである。

然しかしながら耶蘇イエズスは、世俗せぞくの歡喜よろこび、逸樂たのしみの中なかに搜さがしても、見附みづかる氣遣きづかいはない、必かならず十字架じふじかや、苦業くげうや、制慾せいよくの

中に之を索めねばならぬ、マリアの御手本を仰げ「父も私もどれほど心配して捜ね廻つた」と曰ふたでないか。加之、現世には寶なし、たゞ耶蘇ひとり吾等の眞の寶だと云ふことを、聖母の悲傷を見て悟らねばならぬ、舊約の聖者ヨブを見よ、彼は世界の寶は皆な失つた、其富を失ひ、其子女を失ひ、其健康、名譽を失ひ、終には玉の臺より糞土の上にもまで零落れ果てたが、獨天主を失はなかつたから、少しも憂ふる色なく、依然幸福であつた、之に反して、世に不幸と云ふ不幸は少くないが、天

主を失ふより不幸はない、マリアは僅に三日の間見失つてさへ、あれほど悲しまれたでないか、況して天主の親和を全く失つて了つて、「汝はもう吾が有でない、吾れも亦汝の有でないぞよ」と言ひ放たれた罪人は、いかほど悲み嘆いても足りないのである、して一たび天主に見放たるゝや、現世の財寶は、たどひ積んで山を成すとも、たゞ果敢なき煙である、厭らしい物煩である、彼の榮華を極めたサロモン王すら、「すべて皆な虚しい、徒に心を悩ませる許りだ」と嘆息ついたでないか、然るに氣の毒

なのは世の隣むべき盲目どもである、鶏一羽亡くなつても直と捜し求める、犬一匹失つたら食を忘れて探ねる、牛や馬でも失つたものなら、夜の日も寝ずに索ね廻るが、獨、善の善なる天主を失つては、平氣で飲んで、食うて、安眠て居るでないか。

例話

イエズスくわいねんほううち、一の床しい實話がある、印度に一人の青年があつた、一日罪を犯さうと思つて恰度家を出かゝつた時、「止め何處へ往くか」と呼はるものがある、

青年驚いて顧ると、一聲の主は正しく聖母の悲傷の聖像である、御胸を貫いて居る劔を手づから引抜いて「汝罪を犯して吾が子を害しやうと思ふなら、寧ろ斯劔を取つて吾が胸を刺透して呉れよ」と曰ひつゝ、白刃をさし出された、青年之を見て忽ち其場に泣き倒れ、瀧なす涙を濺いで偏に過を悔い、天主と聖母に哀願して、其赦を獲たと云ふ。

祈禱

あゝ聖母よ、耶穌の他に何一つ愛し給はざる御身にし

て、いかなれば、かくも悲み嘆きて御子を捜ねさせ給ふ、
 耶蘇を索むべきは、吾れを始め、すべて罪を以て耶蘇を
 失ひし罪人にあらずや、愛すべき御母よ、御子は捜ぬる
 者には何人にも遇ひ給へば、何卒御子を尋ね参らすべき
 道を吾れに教へ給へ、御身は耶蘇に到る唯一の門なり、
 斯門に由るものは、容易に耶蘇を見出し得べければ、吾
 れ深く御身に依頼み奉る。アメン

第四の悲傷

カルワリオの途上で
 耶蘇に行遇ひ給ふ

御子耶蘇の悲しい御死去が、いかほと母君マリアの御
 胸を劈いたかを知らんと思はゞ、先づ慈愛深き母の、い
 かに御子を愛して居られたかを観ねばならぬ、凡る母の
 情として、吾が子の苦痛は、猶吾が身の苦痛の如く感ず
 るものである、彼のカナアンの女が、救主の足下に拜伏
 して、魔鬼に憑かれて居る娘の爲に嘆願した時、「主よ吾
 が娘を憐み給へ」と曰はずに、「主よ吾れを憐み給へ」と
 曰つたのを見ても解る、世のなみくの母ですら憐うで
 あるとすれば、況して「美しき愛の母」と稱へらるゝマ

リアに於ては、如何ばかりであつたらう。

夫れ耶蘇は、マリアが千難萬苦の中に育てあげた獨子で、其の愛らしいこと、云つたら世に類なく、其母君に對する愛情も、亦世に比なかつたのである、斯御子は、忝くも地上に其聖き愛の炬を投げ込んで、人の心を燒き盡す爲に態々天より降られた天主であつた、されば先づ其聖き愛に燃え立つたものは聖母でなければならぬ「御子の心と私の心とは、愛に結ばれて同一になつて了つた」と聖母がビルジツタ聖女に告げられた語を以ても知られる。

る。

加之、耶蘇はマリアの子たると共に亦天主である、マリアは耶蘇の婢たると共に亦母君である、この色々の關係よりして、炎々たる愛の焰は、天をも焦さん許りに聖母の御胸に燃え立つたが、耶蘇受難の節に至つて、其烈しい愛の焰は、全く悲傷の海洋と化つて了た、其の愛情の濃厚かつた丈け、亦其悲傷も深かつたのである、取り分け聖母の悲しう覺えられたのは、御子が死刑の宣告を受け、十字架を擔つて、カルワリオ山に登られるのに行

遇ひ給ふた時であつた。

聖女ビルジツタに告げられた所に依れば、マリアは耶蘇の御苦難の時期近くに隨ひ、最愛の御子の無惨な御死去を思ひ煩つて、両眼は涙の干る間なく、全身常に冷汗を絞つて居られた。

定つた時は遂に來た、耶蘇は愈死出の旅路に上るとて、一夜泣くく聖母に訣別を告げられた、豫て期したる事とは云ひながら、聖母は胸せきあげて、終夜一目もまごろみ得なかつたであらう。

夜明けて耶蘇の弟子等は、孰れもく、腸も断れさうな報知をもたらして聖母のもとに馳せ來るのである。一人はカイファの邸に於て、御子の凌がれた虐待を告げ、一人はヘロデに浴びせかけられ給ふた凌辱を物語る……最後に主の愛弟子ヨハネが、息絶々に走り來た、「御母よ」彼はハラ／＼と涙を流して叫んだ、「御母よ、不正なるピラトの判決によつて、御子は耻かしい刑罰に定められ、自ら十字架を荷つてカルワリオの山に進まれる、いざ起ちて御子を途に待ち受け、最後の暇乞をなし給へ」。

マリアはヨハネに扶けられて家を出た、路草を染めたる生血を見て、御子の過ぎ行かれたのを覺り、徑路とつて前に出で、御子の御通行を俟ち給ふ、悪黨輩の罵詈、嘲弄の聲々は次第に近いてくる、釘、鐵鎚、綱なんぞ、見るさへ怖ろしき死刑の道具は、物凄き獄卒に運ばれて眼前を過ぎ行く、御子の死刑を公告し行く前觸の喇叭は、云ひしれぬ悲しい響を聖母の御耳に傳へるのである。

前觸、獄卒、死刑の道具の過ぎ去つた後、マリアは不圖目を揚げると、一人の壯年が進んで來る、頭の頂より

足の爪先まで全身傷き破れ、血糊に塗れ、額には刺恐ろしい茨を冠ぶり、肩には二本の長い材木を擔いで居る、マリアは之を眺めても、何人であるか識ること出来なかつた、其面は唾に汚れ、切創に破れ、打傷に腫れ上り、血の凝塊に黝りて、癩病者の如に、見る影さへもなかつたのである。

然し慈母の鋭い眼光は其を終に看破り得た、彼は最愛の御子であつた、その時の聖母の心は果して如何であつたらう、御子を視たいは山々であるが、其痛はしい御姿

に眼を着けるのも亦心怖るしくて、暫し躊躇うて居られ
 たに違ひないが、終に思ひ切つて御子を熟視め給ふた、
 耶蘇も亦兩の眼瞼を掩てる血塊を拂ひ落して御母を熟
 視め給ふた、あゝ此熟視こそ、恩愛の情篤き母子の魂を
 刺貫いた無慘の刃であつた。

英吉利の王、ヘンリ八世の臣トマス、モルスが、公教
 の信仰の爲に死刑の場に曳かれるのに、女のマルガリタ
 は行過つて「おゝ父君よ！父君よ！」とばかりに、氣を
 失つて其足下に倒れて了つた、マリアは御子のカルワリ

オに曳かれ行き給ふに出遇つても、氣なぞ失つて天主の
 母の聖位を辱めるやうなことはなかつた、然し其心は千
 度死ぬるより辛い思がしたのである、もし天主が全能の
 御手を伸べて、之を支へ給はなかつたものなら、聖母は
 確に御母に先だつて死なれたであらう。

マリアは驅けよつて、耶蘇をだき締めたいとは思はれ
 たらうけれども、惡黨輩は之をおしのけ、弱り果て居る
 耶蘇をかり立て歩ませたれば、聖母もよろめく足を踏み
 しめて、泣く泣く御後に従ひ給ふのである、「あゝ聖母よ、

御身は何處へ行き給ふ？ カルワリオの頂までとな？ 御
 身は最愛の御子が十字架に磔けられる痛ましい光景を、
 面に仰視るほどの勇氣あらせられやうか、聖母よ思ひ止
 り給へ、もし御子に従ひ行かれたら、必と其刑の慘酷い
 のに胸を抉られ給ふであらう、御子も亦御身の悲傷の爲
 に腸を断られ給ふに違ない……」。

なるほど、御子の無惨な御死去を仰ぎ視たら、御胸も
 抉られ給ふであらう、御腸もちぎられ給ふであらう、し
 かし母の情として、死地に引かるゝ吾が子を、如何して

も見棄るに忍ばれない……御子が十字架を擔つて先に進
 まれると、聖母は涙に暮れて後にしたがひ、母子ともど
 もに磔けられやうと思召し給ふのである。

夫れ人は猛獸の苦傷にすら同情を寄せるものである、
 子獅子が屠所に曳かるゝ後より、母獅子が随て行くのを
 見たら、誰しも哀を催さずに居られまい、況して垢なき
 神の羔に在す御子が、刑の場に引かれ給ふ其後に、隣な
 る母の涙ながらに従ひ行くのを見て、吾等いかで同情の
 涙に咽ばないで居られやう、吾等は今より聖母の御悲傷

を憫むと共に、主の吾等に降し給ふ十字架を執つて、
蘇とマリアとの後に随ひ行かねばならぬ。

抑も主耶蘇は、他の苦難は己れひとり受け堪へられた
に、何故十字架を擔ふ時だけ、シレネオのシモンの助力
を藉られた、他でない、救霊を得るが爲には、教主の十
字架ばかりでけ足りない、吾等も亦各、自分／＼の十字
架を執つて背負はねばならぬ、而かも死する迄、堪忍し
て背負はねばならぬと諭すが爲であつた。

例話

主耶蘇、一日フロレンスのヤオミルと云ふ童貞女に現
はれて「汝常に私の事を懷つて私を愛して呉れ、私も亦
汝のことを懷つて汝を愛してやらう」と曰つて、之に花
束と十字架とを與へられた、是れ即ち吾等の現世に於け
る慰藉は、必ず十字架に伴はねばならぬとの意を暗示さ
れたのである……十字架！十字架！十字架！誠にな
るを天主に結び附けるものである、イエロニモ、エミリア
ノ聖者を見ても解る、聖者は初め軍人で、素行修らぬ方
であつたが、一旦戦ひ敗れた敵の虜となり、薄暗い牢屋

に繋がる、身の上となるや、翻然己が非を悟り、行を悛め、善徳の馨床しく、後日天國に於て賜はるべき玉座までも仰ぎ看ることが出来た、聖者は後でソマスケ會と云ふ修道會を興して、教を當世に垂れ、範を後の代に遺し、名を聖者の中に列ぬるに至られた。

祈禱

嗚呼悲める御母よ、最愛の御子が死出の旅路に上り給ふに行遇ひし時の御悲傷は、誠に如何ばかりなりしぞ、願くは其御悲傷の功德によりて、主の吾れに降し給ふべ

き十字架をば、勇しく背負ふの力を請ひ求め給へ、吾れ十字架を把りて死する迄御身に從ふを得ば、如何に幸福なるべき、御身は罪もなきに、かばかり重き十字架を御子と共に擔ぎ給へり、吾れは罪人にて地獄にも落つべかりし身の、いかで斯の輕き十字架を辭み奉らん、あゝ汚なき童貞よ、終迄耐へ忍びて十字架を荷ふの力は、吾れ之を御身にぞ仰ぎ奉る。アメン

第五の悲傷

耶穌十字架の上に死し給ふ

髑髏されかうつとて名なさへ忌々いまくしきカルワリオ山やまの頂いたゞき、鮮血ちしほした滴たる
 十字架じふじかの下もとに佇たすんで嘆なげき悲かなむ母ははを視みずや、其最愛そのさいあいの獨子ひとりこ
 が、罪つみ一つないのに惡人あくにんの手に捕とらへられ、鬼おにの如やうな刑吏せめびと
 等らより有あゆる責苦せめくを浴あびせかけられ、十字架じふじかにさへ釘くぎけら
 れて、息絶いまたぬぐに悶もたへ惱なやんで居ゐるのを、面まに仰視あがりみる母はは、
 の心こころは如何いかばかりであつたらう、吾等われらは今いまカルワリオ山やま
 に登のぼり、仰あふいで救主すくひねしの御死去ごしきよを眺ながめ、俯ふして聖母せいぼの御胸おんむね
 を貫つらぬいた第五だいいごの劍つるぎを默想おもひ見みることにしやう。
 救主すくひねしは、前晚ぜんほんよりの虐待しへたげにいたく弱よわりはて、半死半生はんしはんしやう

の躰ていで辛やつと山やまの頂いたゞきに達とれると、刑吏等せめびとどもは何なんの容赦ようしやもあら
 ばころ、躰からだ一面いちめんに密着くつして居ゐる御衣おんころもを無理むりやりむしりと
 り、十字架じふじかに推附おしつけ、金釘かなくぎあらしく御手足おんてあしを打うちつけ
 た、其恐ろしい金鎚かなづちの響ひびきは、いかに聖母せいぼの御胸おんむねを突破つきやぶつ
 たであらうか、かくて十字架じふじかをおし立て、根元ねもとをつき固かた
 めて棄すて去さると、聖母せいぼは徐々そろくと悲かなしい歩あゆみを移うつして、十字
 架かの下もとに進すすみ寄よられた。
 さて聖母せいぼは、如何いかにしてカルワリオ山やまに登のぼられた、
 「刑人つみびとの母ははを視みよ」と指ゆびし罵ののしらるゝのを、婦人をんなの視みに取と

つて餘りに耻しとは思ひ給はぬのであるか、己が造主を
 十字架に磔ける人々の極悪非道の所業を見ても、餘りに
 怖しとは思ひ給はぬのであるか、否、聖母は御子の痛苦
 を懐ふの情切にして、復他を願ふの違あらせられぬ、只
 御子の傍に立つて、責めては、同情の涙なりとも濺ぎた
 いものと思召し給ふのである。

聖母は當時の光景を、親しくピルツタ聖女に語つて
 曰ふやう「愛子耶蘇の臨終の苦悶の痛はしかつた事よ！
 涼しかつた兩の眼は深く窪み入り、半塞つて光なく、唇

垂れて口開け、豊けかつた頬の肉落ちて齒に粘着き、皮
 膚縮み、鼻端尖り、顔の色蒼めて、頭は胸の邊までうな
 だれ、緑の波打たせて居た頭髪も、今は全く血汐に黒ま
 り、腹凹み、手足硬直り、身軀は一面に血塊とでも見
 る位であつた。

隣なる母は十字架の下に佇んで、最愛の御子の臨終の
 有様を熟々と眺めやり、御子が十字架の上で凌がれる程
 の苦痛をば、自分は十字架の下より忍び給ふ、此時カル
 フリオ山の上には、實に二の祭壇の上に二の偉大なる穢

牲にが献さげられて居ゐた、一ふたつの祭壇さいだんとは、耶蘇イエズスの御躰おんからだと聖母せいぼの御靈魂ごれいこんとで、一ひとつには耶蘇イエズスが刑吏せめびこの手てを以もつて其肉そのにくを屠ほつて犠さげ、一ひとつにはマリアが同情おんじやうの及およびもて其魂そのたましひを貫つらぬいて牲さげ給たまふ、否いなな祭壇さいだんはむしろ唯一たひとつ、即すなはち耶蘇イエズスの十字架じふじかの上うへに、神かみの羔こひつじと其母そのははとが犠さげられるのであつた、何なんとなれば、御子おんこの手足てあしを貫つらぬいた釘くぎは御母おんははの手足てあしをも貫つらぬき、御子おんこの懸かけられた十字架じふじかには御母おんははも共に懸かけられた、御子おんこが自分ごんの御肉ごにく体を犠さげ給たまふ時とき、聖母せいぼは自分ごんの御靈魂ごれいこんを牲さげ給たまふたのである。

吾わが子この臨終りんじうに當あたつて、百方手ひやくほうてを盡つくして之これを慰なぐさめやうとするのは母ははの情じやうである、片時かたときも其傍そのはたを離はなれず、之これを勞いたはり、床とこを整ととのへ、飲料ののみものを饌すくめ、枯かれ果はてた唇くちびるを濕うるほし、額ひたひに滲にじみ出る冷汗ひやあせを拭ふき取とつてやるなど、出来できるだけ其痛いたみを和やはらげ、其苦そのくるしみを輕かろめやうと勉つとめないものはない、たゞ聖母せいぼだけが、可愛かあい御子おんこの臨終りんじうに居合ゐあはしながら、些いさかも之これを慰なぐさめ勞いたはること出来できなかつた、御子おんこが満身まんしんの血ちを滴しため盡つくして、其爲そのために焼やくやうな渴かわまを覺おぼえ「渴かくよ」と叫さけばれた時ときでも、瀧たきなす涙なみだの外ほかは一滴いってきの水みづすら饌すくめること出で

來なかつた、御子は荒木の十字架をば苦しき臨終の床と
 して、三本の釘もて釣り下げられ、寸時でも休むこと叶
 はせられぬ、聖母は責めて之を抱き締め、痛い所は撫で
 さすつて、温かい慈母の腕に死なして上げたいと望まれ
 ても、其さへ思に任せず、両手を高く十字架にさし延し
 ても、手はむなしく空を攫んで戻り來る許りであつた。
 今や最愛の御子け底知られぬ、苦惱の淵に沈み入り、
 この世の氣息もはや奄々に、自分を慰めて呉れる人もや
 と見廻し給へども、慰める所か、人々擧つて御子に敵ふ

ばかりである、路行くものすら頭を揺つて嘲笑る、「汝果
 して神の子ならば十字架より下れ」と面に罵るもあれば、
 「他人を救けたものが、吾が身は救けきれない」と叫ぶ
 もある、或は聲高らかに「汝もしイスラエルの王ならば
 今十字架より降つて見よ」と冷笑ふもあつた、盜賊と曰
 ふのもあつたらう、欺瞞者と呼ぶのもあつたらう、殺し
 ても足りない大悪人よと罵るのもあつたらう、其を聞く
 聖母の御胸は、百千の劍を一度に突立てられる思がした
 に違ない。

然しながら、御子が十字架の上にて、其慈愛深き御
 父君にまで見棄られ給ふたと見ゆ、悲しげな聲して、「吾
 が神よ、吾が神よ、何故吾れを棄て給ふ」と嘆かれるの
 を聞いた時ばかりは、流石の聖母も胸せきあげて堪へ難
 く覺ゆられた、聖女ビルジツタに啓示られた所によれば、
 この悲しい聲は何時迄も聖母の御耳に残つて、忘れやう
 としても忘れること出来なかつたのである、斯の如く、
 聖母は最愛の御子が云ふに云はれの苦惱に悶へ給ふのを
 見ながら、聊かの慰安でも與へること叶はず、たゞ潸然

と暗涙に咽び給ふばかりであつた。
 番に御子を慰めること出来ないのみならず、聖母の悲
 傷、痛嘆は、皆な溢れて耶蘇の御心に注ぎ込んで、愈其
 御痛を増すのみであつた、耶蘇は吾が身の痛苦は打忘れ
 て、聖母の御悲嘆を一入切なく覺ゆられたので、之を見
 る聖母の御胸は、愈はり裂くる思がしたのである。
 斯る激しい悲傷をも聖母がよく沈黙つておし凌ぎ、少
 しも掻きくごさ給ふやうなこともなかつたのを見ては、誰
 か感じ入らないものがあらう、然し聖母は口にこそ出し

給はなかつた、心は決して沈黙り給ふたのでない、吾等の救霊の爲に、御子の貴い生命をば神の正義の祭壇に犠げて、以て其人類救贖の大事業を協力け、吾等に聖寵の生命を得さして下さつたのである、主耶蘇嘗て聖女ビルシツタに告げて「御母マリアは、其燃ゆ立つ愛情と、吾が苦痛に對する同情とによつて、萬人の母となられた」と曰ふた、然らば聖母は正しく吾等の母であつて、十字架の下に於て、言語に絶わたる苦痛の中に吾等を産み給ふたのである、してこの母たるの情が、聖母の心に刻ま

れて永く消ぬ失せない爲に、主は十字架の上より聖ヨハネを指摘しながら特に聖母に遺言して、「婦よ汝の子茲に在り」と曰ふた、是れヨハネを以て一般人類を代表せしめて、之を慈愛に満てる聖母の御手に托け給ふたのである、聖母は直に其優しい御腕を擴げて、罪惡に溺れて居る人類をかき抱かれた、然して最初に聖母の御仁恵を蒙つたのは、夫の憐なる盜賊であつた。

口傳によると、聖母がイエズスを懷にして埃及に落ち行かれた時、彼の盜賊に情をかけられ給ふたことがあつ

たから、聖母は彼れが今はの際に、御子の十字架と彼れの十字架との間に立つて、彼の爲に祈られたので、彼れ終に悔悛めて救はるゝこと出来たのである。此時より聖母は何時も變らぬ愛情もて、慈愛深き母の責務を盡して已み給はぬのである。

例話

伊太利のペルーズの町に一人の青年があつた、悪事を企て、魔鬼の援助を乞ひ、事もし意の如く成つたら自分
の靈魂を渡さうと固く契約して、其契約書に血判まで捺

した、罪を犯し畢ると、魔鬼は青年を唯ある井端につれ
行いて「身を投げよ、投げなければ靈魂肉身諸共に地獄
に引込むぞ」と威嚇した、憐なる青年今はとても、遁る
べき道なきを見て、やをら身を起して井の上に登つた、
登つては見たが、死ぬことの流石に心怖ろしく、魔鬼に
向つて曰ふやう「如何にしても飛び込む勇氣がない、是
非と云ふなら自分で私をつき落して呉れよ」、「よし然ら
ばつき落してやるから先づ其聖衣を脱ぎ棄てよ」と魔鬼
は答へた、青年は其時實に聖母の七の悲傷の聖衣をかけ

て居たのである、サテは自分は未だ聖母に棄てられて居ないかと悟つて、青年なかく脱ぎ棄てない、魔鬼も少しばし争ふて見たが、とても勝てないと見て悄然として逃げ失せた、青年直に聖母の聖像の前に馳せ行いて、其大恩を感謝し、己が罪を痛悔して行を悔めた、して自分が救はれた光景を繪いて、之をペルーズの聖母堂の聖母の祭壇に奉納げた。

祈禱

あゝ總ての母の中に最も悲める母よ、御子は遂に死し

給へり、御身を一心に愛し、御身にも一心に愛せられたる御子は終に死し給へり、御悲嘆の程、誠に察し上げ奉る、あゝ聖母よ、吾れにも御身の側に立ちて嘆くを得せしめ給へ、吾れ痛く御子に背きたれば、御身にも優りて嘆き悲しむべきにあらすや、いかに憐の御母よ、御子の御死去と御身の御悲傷とによりて願ひ奉る、何卒、吾れに罪の赦と終なき生命とを得せしめ給へ。アメン

第六の悲傷

耶蘇十字架より下され給ふ

夕陽の影いと侘しきカルワリオ山の頂、エンミア預言者の語を反覆して泣き口説く聲哀れに聞ゆ、「あゝ汝等路行く人々想ひ見よ、吾が悲傷の如き悲傷が復とあるであらうか、吾が最愛の耶穌は儂くなられた、吾が心はもう永へに慰められやうとも思はれぬ」と、母心の篤き恩愛をかけて、こよなき寶と愛でいつくしんで居た御子を失はれた聖母の御心、さもあるべきであつたらう

然し耶穌の御死去は、また聖母の御悲傷の終局ではない、聖母は御子の脇腹が無慘にも槍尖に貫かるゝを見、

又冷かなる御亡躰をたき締めて、斷入る思に御胸を破らるべきである。

吾等は今謹んで聖母の第六の御悲傷を默想ひ、責めては一掬の涙を濺ぎたいものである、是迄の悲傷は、一つ宛聖母の御心を貫いたのだけれども、今度ころは百千の白刃が、一度にこの慈愛深き母の御胸に蝟集たのである。

母の常として、其子の息絶へたと見るや、愛惜の情むらくと發りきて禁めやうもない、人々は其悲傷を和げやうとして、時には、母を苦めた其子の不足を物語るこ

とがある……「聖母よ、私も恚うして御身の悲傷を慰め
参さうか、然し御子は御身に對して何の不足があつた、
何時も御身を愛し、御身に從ひ、御身を尊敬して渝り給
はなかつたのに、今は則ち亡し、あゝ誰か亦御悲傷の
ぞを察し得るものぞ」。

翌日はバスマ祭の安息日である、屍を十字架に遺し置
いては大事な此祝祭日が汚れると、猶太人等は氣は氣
でないけれども、死んだ後でなければ取り除ける譯にも
行かぬので、終に兵士等に命じて慘酷極まる處置を執ら

せた、彼等は先づ鐵棒を振つて、救主と共に磔けられた
二人の盜賊の脛を打碎き、やがて聖母が今しも御子の息
絶えられたのを嘆き給ふ處に、つかくとやつてきた、
聖母は覺せず身振して叫ばれた、吾が子は死んで居る、
もう辱めて呉れな、斯母を不憫と思は、其ばかりは許
して呉れよ」と折入つて願ふのも願はず、一人の兵士は槍
を躍らして、耶蘇の御脇めがけて突かけた、十字架はゆ
らくと揺いで、救主の心臓は二に分れ、傷口よりは僅
に血と水とが流れ出た、斯血こそ、救主の御躰に残つて

居た丈けの血で、救主は吾等の爲に全身の血を搾り盡して、今は一滴も餘す所なしと證し給ふたのである。

斯て槍はたしかに耶蘇の御肉躰を傷けたが、其苦痛を感じたのは聖母であつた、シメオンの豫言した悲傷の劍こそ正しく是であつた、聖母嘗てビルジッタ聖女に告げて、槍の穂先の血に染んで眞朱になつたのを見て、さては御子の心臓は貫かれたかと思つて、吾が心も突きさとはされた思がした」と曰ふたが、實際此時ばかりは、天主の全能の御手が支へ給はなかつたら、聖母は餘りの悲さ

に消ぬ入り給ふたであらう、痛ましや、今迄は責めて同情を寄せて呉れる御子が在したが、今は空しく獨悲み給ふのである。

聖母は最愛の御子が、猶是上にも辱めらるゝを見るに忍びず、アリマテアのヨセフに頼んで、御子の聖屍をピテトに請受て貰つた、ヨセフはピラトの許に行つて、母の悲傷と其願望とを訴へると、ピラトも流石にろを不憫に思つて、快く其請を許した。

ろここで救主の聖屍は、十字架より下されるのである、

「あゝ聖き御母よ、御身が世の救贖の爲にとて、燃ゆ立つばかりの情愛を籠めて興へて下さつた御子を、今世の人は謹んで御返上し申す……」返上す？返上すのはよいが、是はく何と云ふ淺ましい光景であるぞ、白くして薄紅の色を帯びて居た御子をば、汝等は打傷に黒ませ、艶々しい其顔容は、血塗となして返すのであるか、何處に其麗はしい倂が仄見ゆる、昨日までは愛慕の情に堪へられないほどであつたものを、今日は一目見ても悚然とするほどでないか……」。

聖女ピルツタに啓示られた所に依ると、耶蘇の御躰を下さんとて、弟子等は三の梯子を十字架にかけ、先づ両手の釘を抜き、次に両足の釘を取つて聖母に渡した、斯て一人は上より一人は下より聖躰を抱いて十字架より下すと、聖母は足を爪立て、腕さし伸して之を受け、抱き締めたまへ、撞と十字架の下に座し給ふ、視れば御口は開け、御兩眼は消ゆ失せて光なく、肉は此處彼處破れ、骨は眞白に顯はれて居る、茨の冠をとり外して其傷痕を數へ、打貫れたる御手足には涙の雨を濺ぎ給ふ「……お

「愛子よ」聖母は吾れを忘れて泣き口説かれる「……お
 愛子よ、汝は人を愛して終にかゝる有様に成り果て
 た？ 汝何の悪事を爲したればとて、恚まで酷い目に遭は
 された？ 汝は吾が歡樂で亦光榮であつたに……愛子よ、
 吾が如何なる悲傷に沈んで居るかを見よ、今一度吾れを
 眺め呉れよ、慰め呉れよ……お、汝は吾を見ない……た
 ゝ一言聞かして呉れよ、慰の一言聞かして呉れよ……お
 汝は一口も言つて呉れない、お、汝は死んで居る！ さ
 てもこの茨の怨めしさよ！ 斯釘！ この槍の情なさよ！

汝等の造主を何故こんなに苦しめた、然し是は汝等の罪
 でない、吾が子を苦めたのは夫の恩知らぬ罪人等である
 ぞ……」。

聖母は實に斯く曰ふたであらう、罪深い吾等に向つて
 斯く歎かれたであらう、然し今でも苦痛を感じ給ふこと
 あつたら如何だらう、御子は吾等の爲に二となき生命ま
 でも棄て下さつたのに、吾等が今猶は罪に罪を重ねて、
 絶へず御子を虐げ、十字架に釘けるやうな仕打に出るの
 を見ては、どうして胸も破るゝ思がしないだらう。

あゝ吾等は何時迄御母を苦める、速に過を悔め、痛悔の涙を溢らせつゝ、打貫かれたる耶蘇の聖心にかけて寄ることにしやう、「罪人よ、斯心に歸りこよ」と聖母は吾等を靡いて居なさるでないか、「おゝ罪人よ、吾が子の聖心に歸りこよ、痛悔の念さへあれば、吾が子は喜んで汝等を受け給ふであらう、もし其御怒に堪へ兼ねれば、其聖心の中に隠れよ、もし判事としての御威光が怖ろしければ、救主として其御蔭に遁れよ、其法庭を逃げて、其十字架の下に隠れよ」。

耶蘇が十字架より下され給ふた時、聖母は其兩の眼瞼を閉ぢること出来たが、其硬直つた兩腕は枉ぐることもなかつたと云ふことである、是れ取りも直さず、主が兩腕をひろげて、心より悔い悛めて歸り來る罪人を何時でも待ち給ふと云ふ意を表したものでないか。

「視よ今は愛の時であるぞ」、今ころは誠に恐怖の時でない、愛の時である、吾等を愛して、苦んで、死んで下さつた主耶蘇を一心に愛すべき時である、主の聖心の傷けられたのも、畢竟其見ゆる傷を透して、其見ぬない愛

の傷を見せるが爲でなかつたか、されば主は忝くも御脇を開いて、吾等に其尊き聖心を與へて下さつたから、吾等も亦、義として吾等の心を主の聖心に献げねばならぬ、吾等の心は太く罪惡に汚れては居るが、之を聖母の清き御手を以て献げたらば、主は必ず拒排み給ふまい、次の例話を讀んでも知られる。

例話

嘗て一人の哀れな罪人があつた、罪と云ふ罪は犯さないのはなく、遂に自分の兄弟や、生の父までも殺した

揚句、逃亡して所々方々を流浪して居た、四旬節の頃、不圖した序に「神の憐」と云ふ説教を聽いて大に感じ、其説教師の許に行つて告白を請ふた、司祭は彼の怖ろしい罪を聽いてから、「悲傷の聖母の祭壇の前に拜伏して、痛悔の恩と、罪の赦免の恵とを願へ」と曰つて遣した、彼れ直に従つて往つた、祈を始むるや否や忽ち其場に倒て死んだ、翌日司祭は信者に向つて、この憐なる罪人の爲に祈り呉れよと頼んで居る折しも、一羽の白鴿、頭を掠めて飛んできて、一の紙片を落して去つた、司祭驚いて拾

ひ上げて見れば、次の如き文句が書いてあつた「死者の
靈魂は肉身を離るゝや、直に天國に昇つた、汝續いて限
なき神の御憐れを説教せよ」。

祈禱

あゝ聖き童貞よ、吾れを憐み給へ、吾れ今迄は御子を
愛せざりしのみならず、屢之に逆ひたれども、御悲傷の
功德によりて偏に御赦を願ひ奉る、されど吾れ罪の赦を
蒙りしのみにては満足せず、猶ほ進んで御子を一心に愛
し奉らんと欲す、美しき愛の母なるマリリアよ、願くは吾

が爲に斯聖寵を請求め給へ、あゝマリリアよ、御身は總て
の人を慰め給へば、吾れをも慰め給へ、吾が願をも聽入
れ給へ。アメン

第七の悲傷

耶穌御墓に葬られ給ふ

口を閉ぢ、眼を閉ぢ、苦しい息も早やかすかに、死の
影にだんく其面を掩はれんとする愛子の傍に伽する母
の心には、其子の千苦、萬痛、潮の如に打寄せくるのは
言ふ迄もないことであるが、然しもう息の根も切れて、

野邊の送を爲さんとする時の母の悲傷は、亦何物にか譬へられやう。

聖母の御胸を貫いた第七の剣と云ふのは即ち是である、聖母は親しく御子の處刑の場に臨み、其痛ましい臨終の様を備に眺め、其冷い御屍を暫し兩腕に搔抱かれたが、今は終に之を御墓に葬つて其最愛の御獨子に最後の訣別を告げやうとし給ふのである。

夕陽は正に西に傾いて、春ながらも何となく物凄しい光を斜にカルワリオの頂に送つて居る、マリアは血染の十

字架の下に座し、冷かい御亡躰をだきしめて絶入るばかりに嘆き給ふ、かくては聖母の爲に却て悪い、急いで葬つて了つたが可からうと、弟子等は強ひて聖躰を請ひ受け、没薬など塗つて用意の布片に包んだ、此布片は救主の聖い面影を止めて、今猶ほイタリアのツリンの町に保存せらる。

準備もろこくに調ふた、聖躰は將に御墓に運ばれんとするのである、哀傷を含んだ人々の一行は静々と動き始めた、弟子等は恭しく聖躰を奉持し、無数の天使は其

周圍まわりに天降あまくだつて護衛ごゑいされる。泣き萎しぼれたる聖母はは、一三にさんの聖たふとき婦人ふじん等に伴ともなはれて御墓みはかまで從したがひ往ゆかれた。

既に御墓みはかに着ついた、聖母せいほは自分じぶんも一緒いっしょに葬はうむられたいと

は思おもはれたであらうが、天主てんしゆの思召おほしめしでないから仕方しかたがな

い、茨いばらの冠かんむりも三本さんほんの釘くぎも共に葬はうむつた、石いしを轉ころばして御墓みはか

を塞ふさがうとして、弟子等でしたちは聖母せいほに向むかひ「御墓みはかは塞ふさがねば

ならぬ、氣きを慥たしかに、今一度いまいちど御子おんこを眺ながめて最後さいごの暇乞いさまごひをな

し給たまへ」と申まうせば、聖母せいほは溢あふる涙なみだを吞のみ込み「お

ゝ耶蘇イエズスよ、吾わが愛子あいしよ、是これが最後さいごの見收みせりであるぞ、汝母なんぢは

の離別りべつの一言いちごんを聽きき入れて、母はの心こころも一緒いっしょに葬はうむらして吳く

れよ」と哀かなしい訣別わかれを告つげられた、實じつに聖母せいほの聖心みこころは、

耶蘇イエズスの聖躰みからだに附纏つきまつつて離れ得ななかつたのである。

弟子等でしたちは石いしを轉ころばして御墓みはかを塞ふさいだ、天てんにも地ちにも唯た

つた一つの御寶みたからは、此このほのぐらい洞穴ほらあなの中に隠かくされ畢まはつ

た「汝等なんぢらの寶たからのある所ところに汝等なんぢらの心こころもあるであらう」との

聖言みことばに違たがはず、マリアは其心そのこころを遺のこして、耶蘇イエズスと共に葬はうむら

れ給たまふたのである、耶蘇イエズスはこよなき御寶みたからであつたからた。

今吾等いまわれらの心こころは何處いづこに在ある、塵芥ちりあくたにも等ひごしき世俗せぞくの中に

ありはしないか、寧ろ耶蘇の聖心の中に置かねばならぬ、
耶蘇は天に昇られても、猶ほ吾等の心を引取つて自分の
所有となさうと思つて、生ながら祭壇の聖き秘蹟の中に
籠つて居なさるでないか。

かくて聖母は、御子と御墓とに暇乞して歸られた、其
悲しい歩は、遇ふ人毎に涙を抑へ兼ねしめた、弟子等も、
婦人等も、死んだ耶蘇の爲めよりも、生きて居る聖母の
爲に袂を絞るのであつた。

宿に歸りついて見れば、寂さが彌増に感じらるゝ、邊

を見廻しても耶蘇は見えないで、ただ其妙なる御生涯と
悲惨しい御死去の光景とが、かはるゝ涙の中に浮び出
るのである、ベトレヘムの馬屋、ナザレトの住居、御子
と明し暮した三十三年の歲月、恩愛の情の籠つて居た其
目色、神々しき其舉動、聖き其金言など思ひ續ける中に、
忽ち又慘酷たらしいカルワリオ山の景色が目の前に立ち
顯はれる、手足を貫く鉄釘、頭を穿つ茨、裂け破れたる
肌、深く溝をなしたる傷、眞白に顯はれてる骨々、口開
け、眼消れたる痛々しい有様など、面に眺むる心地がす

るのである。

此晩マリアの飲泣は、いかに四隣あたりの寂寞さびしさを破つたであらう……「おゝ親愛なるヨハネよ、汝を愛された師の君は如何になられた、愛女マダレナよ、汝の愛して居た御方は何處に在します……」憐なる母は、將に物靜かな春の一夜を泣き明さんとするのである、側の人々も亦一つ聲に泣き沈むのであつた。

吾等ばかり泣かずに居られやう……「あゝ聖母よ、泣くべきは御身でない、御身は罪なし、吾等こそ罪に罪を重ね

ねた悪人、吾等に泣かしめ給へ、切めては御身と共に嘆かしめ給へ、聖母は御子を慕つて嘆かれる、吾等は吾等の罪を悲んで嘆かう、然らば次に記す修士のやうな幸福に與ることも出来やう。

例話

昔し一人の修士が居た、極めて心の小な人で、殆ど失望の淵に陥らんとすること屢であつた、幸にも此修士は、兼ねて悲傷の聖母を殊の外尊敬して居たから、かゝる時には必ず聖母の御助を呼び求め、其御悲傷を默想して、

吾れと吾が身を勵まして居た、臨終の間際になると、魔鬼は日頃に倍して其懸念をかき發し、愈失望の淵底深く突き落さうとするのであつた、慈悲深き聖母は、修士の戦ひ疲れて既に危くなつてゐるのを見ていとゞ、不憫に思召し、忽ち其枕邊に顯はれ、御聲優しく之を慰めて、「恐るゝな、汝は平生吾が悲傷を同情つて、屢吾れを慰めて呉れた、今耶蘇は汝を慰めさうとして吾れを遣された、いざ喜んで吾れと共に天國に來れ」と曰ふた、斯一語に修士は、心配も、氣懸も、かつさりと拭ふが如く消え失せて、

せて、満面に笑を含んで、眠るが如く息絶へた。

祈禱

嗚呼悲傷の御母マリアよ、吾れ御身を獨り悲ましむるに忍びず、吾が涙の雫をも御身の涙の雨に加へんと欲す、願くは吾れをして、御子の御苦難と、御身の御悲傷とを思ひやりて、絶えず同情の涙に咽ばしめ給へ、斯同情の涙ころ、吾が臨終の間際に、十分の希望と勇氣とを吾に發さしめて、以て吾を失望の淵より救ひ上ぐべけれ、又是によりて、吾れは吾が罪の赦を蒙り、吾が終を全うし、

天國に於て御身と共に、主の限なき御憐を長へに讚美するを得ん。アメン

善終を願ふ祈

罪人の倚頼にして又慈の母なるマリアよ、御身は血染の十字架の下に佇みて、云ひ知らぬ悲傷に腸を断らせ給へり、其御悲傷の功德によりて頼み奉る、何卒吾が現世を出んとする時、御憐を垂れて吾れに臨み、地獄の敵を打拂ひ、吾が靈魂を受取りて、之を御子の法庭に進め給へ、彼の恐るべき時に當りて吾れを見棄て給ふ勿れ、吾

れ御身の外に誰をか頼り奉らん、吁聖母よ、願くは吾れをして御身の御足を抱きしめ、御子の御傷の中に隠れて、「耶蘇マリアよ吾が靈魂を御手に托せ奉る」と日ひつゝ、安然に息絶ゆるを得せしめ給へ。アメン

決心

- 一、屢、聖母の御悲傷を默想して、同情の涙を濺ぐべし。
- 二、聖母の御悲傷の原因は罪科であるから、自分も務

- めて之を避け人にも務めて之を避けしむべし。
- 三、随つて罪人の改心を、毎日、熱心に祈るべし。
- 四、善を勵み徳を磨き、耶穌を一心に愛して、聖母の御胸につき立つて居る悲傷の劍を、一本たりとも抜き去らうと努むべし。(譯者)

聖母マリアの七の悲傷 終

附 録

耶穌基督の御苦難の默想

日曜日 御苦難の中に顯はれたる天主の愛

(一) 聖ポーロ曰はく「基督は私等を愛して、己を私等の爲に渡された」と、天主が人間の爲に死なれる……あゝ是れ何たる不思議の愛であらうか。

舊約の時代は正しく恐怖の時代で、天主の愛は格別人に知られず、天主が何處まで人を愛し給ふかは疑へば隨

分疑はれぬでもなかつた、然し今や天主親らが斯卑しい人間の爲に十字架に磔けられ、鮮血に塗れて死に給ふのを視ながら、誰か敢て天主の愛に一點の疑でも挟み得るものがあらう。

視よ天主の御子は私等の病患を御身に引受け、私等の痛苦を御肩に擔はれた：主は實に私等の罪の爲に傷けられ、私等の愆の爲に碎かれ給ふた：自分の貴い御血を一滴も餘さず滴め盡して、以て私等の罪の汚點を洗ひ落して下さつたのである、何と驚くべき愛ではないか。

あゝ主耶蘇よ、御身の愛を思へば、何して一日でも御身を愛しないで居られやう、斯る大恩を忝うしながら、御身を一心に愛しなかつたら、其こそ憎みても足りない忘恩奴と曰ふべきであらう。

主よ、私は今迄御身の愛を想はず、御身を輕じて居たにも拘らず、御身は私を棄て給はなかつた、私は畏多くも御身に背を見せに、御身は却て私を搜ねて下さつた、私は罪を犯して御身に叛いたに、御身は快く私に赦して下さつた、私は一度ならず二度ならず御身に叛いたに、

御身は一度ならず二度ならず救して下さつた、サテも御身の愛の深いことよ、願くは斯愛の綱もて私を緊しく御身に結着けて、何時迄も離れ得ざらしめ給へ、あゝ限なき善にて在す天主よ、私は御身を愛し奉る、私は御身を愛し奉る、何時迄もく愛し奉るであらう。

(二) 主耶穌の凌がれた御苦難、御死去も難有いには違ないが、然し斯程の惨酷たらしい責苦を、斯卑しい人間の爲に凌いで下さつた御芳志を思へば、猶更ら難有くて、感謝の念、愛の情に胸は破れん許りに覺ぬないものはある

まい。

夫れ人間を救はんが爲には、是非とも彼様に酷い苦痛を受けて、御死去遊ばす必要があつたのでない、主は天主にして人、人にして天主であれば、一雫の涙、一滴の血を以ても優に千百の世界を贖つて餘あつたのである、其れに涙は愚か、御血の有り丈を滴め盡して、筆にも辭にも述べ盡し難き苦痛、凌辱の中に御生命を果されたのは何の爲であるか、たゞ人間に自分の愛を示して、人間より愛されたいと云ふ一念に外なかつたのである、故に

聖ポロは絶叫んで、「基督の愛は私等を壓迫る」と曰つた、「基督の御苦難」「御死去」と曰はずして「愛」と曰つた、「愛が私等を壓しつけて、餘義なくも愛させる」と曰つたのは流石に聖ポロである。

主よ、御身はかゝる貴い價を拂つて人間の愛を求め給ふたが、世には誠心より御身を愛するもの果して幾人あるであらうか、財貨を愛するものはある、名譽を愛する者はある、快樂を愛するものはある、親を愛し、朋友を愛し、禽獸を愛する者さへあるが、御身を一心に愛する

ものに至りては、寥々として雨夜の星よりも少いでないか、責めて私は其少い人の中に數へられたい、よし今迄は世の儂きものを愛して、御身を輕んじて居たにせよ、今は萬事に超えて御身を愛し敬ひ奉る。

あゝ最愛の主よ、御身は私を愛して、御自身を殘らず私に與へて下さつた、私も御身を愛して一身を御身に獻げ奉る、御身は私を愛して死んで下さつた、私も御身を愛して死にたい、御身の望み給ふ時、望み給ふ所で、望み給ふ儘に死にたい、私の願望を嘉納れ給ひて、一心に

御身を愛するを得せしめ給へ。

(三) 主を愛するの情に温まらうと思はゞ、屢々御苦難を黙想するに若くなしである、實に聖ホナヴェンツラも曰つた如く、主の御傷は、如何に頑な胸でも刺貫く愛の劍如何に冷きつた心でも煖める愛の火焰である、平生主の御苦難を黙想して居る人は、罪を犯さうと思つても犯されない、主を愛すまいと思つても愛せずに居られない、限なき御智慧の天主が、殆んど熱狂する迄に自分を愛して下さつたかと思つては、自分も主を愛して熱狂せずに

居られないのである。

慈悲深き天主よ、人は何を以て斯程の御慈愛に酬い奉ること出来やう、愛に酬ゆるには愛を以てしなければならぬ云ふが、サテ如何なる愛を以て御身の愛に酬ゆること出来るであらうか、人を愛して死んで下さつた御身の愛に酬ゆるには、別に天主でも死んで下さらなくては、到底出来る事ではあるまい。

あゝ限なく愛すべき天主よ、私に御身を愛したい、今よりは唯御身の爲に、唯御身を愛するが爲に、唯御身を

喜ばするが爲にのみ生存へたい、御身の望み給ふ所を命
じ給へ、何事たりとも必ず聖意を満足させ奉るであらう、

わが頼なる御母マリアよ、私の爲に耶蘇に祈り給へ。

月曜日 ゲツマニアの血の汗

(一) 救主耶蘇はいよくゲツマニアの園に進み入り、
身を以て人々の罪に代らんと思召し給ふ、悲惨しき御苦
難の幕は茲に開かれた、忽ち云ひ知らぬ恐怖、悲哀は、
主の聖心に襲ひ蒐つた。

主は先づ御死去と、御死去に伴ふ無限なき御苦痛を、非

常に怖れ給ふたのである、即ち其晩より翌日にかけて凌
がねばならぬ萬ての責苦、萬ての罵詈、凌辱、鞭も、茨
も、釘も、十字架も、早や其時歴然と眼前に眺め給ふの
であつた、取り分け其悲惨しい御死去：天主にも人にも
見棄られ、露程の慰藉も受くること出来ない悲惨ましい
御死去を眺め給ひては、戦ひ慄き、「父君よ、もし出来得
れば斯杯を遠け給へ」と悲しい聲を絞りて祈られたので
ある。

いかに愛すべき救主よ、御身は私を救はんとして斯程中

で苦まれたのに、私は其を難有くも思はず、却て罪に罪を重ねて、御身の愛を軽んじたのである、今、心の底より悔み悲み奉る、赦し給へ、主よ私の忘恩の罪を赦し給へ。

(二) 主は更に非常の悲哀を覺えられた、一吾魂は死ぬるやうに悲しい」と被仰つたのを以ても、其悲哀の如何に甚太しかつたか、察せらるゝであらう。

抑も主耶穌が、斯る悲哀の淵に沈み入られたのは、御苦難御死去の痛ましい場合を思ひやりてゝもあつたらうが、然し主に人々の罪の忌々しい姿を眺め觀てゝあつた、

驕慢であれ、嫉妬であれ、邪淫であれ、贖聖であれ、有りとも有ゆる罪愆：其恐ろしい姿、耻かしい場合までが眼前にちらついて、謂はゞ虎狼の如く、爪を張り牙を鳴らして主に飛びかゝり、其聖心を掻き破つたのである：自分ば世に罪惡を根絶やしたいばかりで、態々斯涙の谷に天降り、十字架にまで磔けられて死するのには、罪惡は彌増に殖ゆるばかりで、少しも減りはしない、御父に背くものばかりで、愛して呉れるものとしては居ないかと思ひ給ひては、胸ははり裂け、腸はちぎれ、血の汗は全身より

タラしくと流れ下りて、衣を染め地を濕したのである。

最も愛すべき耶蘇よ、御身を死ぬやうに悲ませ参らし

たのは實に私の罪である、私が罪を犯さなかつたら、

御身は斯様に悲まれる筈はなかつた、私が罪を犯して身

に快樂を覺れただけ、御身は苦まれたのである、私は御

身の愛に酬いやうとはせずして、却て苦痛を増し、悲哀

を加へたかと思へばどうして、痛恨の餘に死なずに居ら

れやう、主よ赦し給へ、私は心の底より悔み悲み奉る。

(三) 主は人々の罪惡を悉く背負はされ、仰いで天を望

むも何となく裏耻かしい心持がして、頭を垂れ、地に拜
伏して祈られた、斯時、主は特に私の爲に罪の赦を御父
に祈り、私の罪を償はんが爲に、一身を抛つて犠牲とな
つて下さつたのである。

斯程の御慈愛に何を以て報いられやう、斯程の御慈愛

を信じながらどうして、何一つでも主の外に愛すること

の出来やう、私は今、死苦に惱んで居なさる救主の御足

の下に拜伏して謹んで申し上げ奉る。

愛すべき救主よ、何して御身は、私見れやうな罪人を

愛して下さつた、私の忘恩の罪は眺めながら、何して御身は、私の爲に死ぬ氣になつて下さつた、主よ、御身がゲツマニアの園で感じ給ふた悲哀を、私にも感じさせ給へ、私は今犯したはこの罪を悉く忌み嫌ひ奉る、御身が私の罪惡を見て戦ひ慄かれた如く、私も戦ひ慄き奉る、主よ、私は御身を愛し奉る、御身の爲には如何なる責苦でも、如何なる凌辱でも、如何なる苦悶でも甘んじて耐へ忍びたい、たゞ御身の痛ましい御死去の功德によりて、私に終を全うするを得せしめ給へ。

吾が頼なる御母マリアよ、私の爲に耶蘇に祈り給へ

火曜日 耶蘇捕はれ給ふ

(一) ユダスは捕手を案内して、ゲツマニアの園に推寄せ、接吻を以て主を敵の手に渡した、捕手は忽ちバラバラと進んで主を捕へ、大罪人見たやうに高手小手に縛り上げた、之を見た弟子等は、卑怯にも皆な主を打棄て、一目散に逃げ失せたのである。

サテも弟子等の腐甲斐なさよ、「假令ひ死すとも主を棄てまい」と誓つた舌の根の乾かぬ中にもう、主を打棄て

逃げ失せたのであるか！されど主よ、是は御苦難の當時ばかりでない、今でも主の途を歩まんと誓ひ、格別の聖寵までも數々戴きながら、僅かの都合の爲に、或は人目を憚り怖れて、或は一時の儂い快樂に曳かされて、御身を棄て顧ないものが幾程多いか知れぬ：して私も！あゝ私も斯る忘恩奴の一人であつた、如何に憐の耶蘇よ、私に救し給へ、今よりは、決して／＼御身を棄てまい、私は御身を愛し奉る、御身の聖寵を失はんよりは、寧ろ百たび千たび死せんと決心し奉る。

(二) 耶蘇は大司祭カイクアの前に引据ゑられ、弟子の事や、教の事を問はれて、「自分は内密に教を説いた覺がない、此處に居合せる人々も、自分の教は知つて居る筈である」と極めて穩かに答へられた、すると一人の家來が「大司祭に向つて左様な答をするか」と曰ひさま、勿体なくも主の御顔に掌を喰はした：人々が御父に加へる狼藉を償はんが爲に、主はかゝる侮辱を受け給ふたのである。

カイクアは更に耶蘇に向つて、「汝は果して神の子基督

なるか」と訊ねた、耶蘇は「然り」と答へ給へば彼れ忽ち自分の衣を引裂き、「神を瀆した」と大聲に叫んだ、群衆は之に應じて「死に當る罪人だ」と呼はつたのである。

主よ、御身は誠に死に給ふべき筈ではあるが、然し其は決して「神の子」と曰ふたからでない、たゞ私の罪に代つて下さつたからである、あゝ御身は實に身を殺して以て私を活して下さつた、然らば私の生命はもう私の有でない、御身の有である、御身の爲にしか使用つてはなら

ない、主よ私は御身を愛し奉る、たゞ御身をのみ愛し奉る、御身は王の王にて在しながら、極めて卑賤い奴隷の如く扱はれ給ふたから、私も御身に對して、如何なる凌辱でも甘んじて耐へ忍びたい、願くは御身の受けられた輕侮、凌辱の功德によりて、私に耐忍の力を恵み給へ。

(三) 主が「死に當る罪人」と宣告され給ふや、惡黨輩は何の憚る所もなく、主の聖面に唾するやら、拳を固めて撲ぐるやら、目隠して嘲弄るやら、全能全智の主に向つて有りと有ゆる侮辱を浴びせかけた：搗て加へて弟子

頭のペトロまでが、三たびも主を知らないと言ったのである。

主よ、私は今御足の下に拜伏し奉る、人に棄てられ、嘲られ、苦められて居なさる主の御足の下に拜伏し奉る私も幾度か御身を軽んじ、御身を否んだのである、今悔み悲んで偏に赦を願ひ奉る、私を憐れうまで愛して下さつた主の聖心を悲ませたかと思へば、誠に身にたい心地がする、主よ、私は今より御身を愛して、御身の爲に苦み御身の爲に死するのを何よりの幸福と存じ奉る。

憐深き耶蘇よ私の罪を赦し給へ、御身がペトロを顧みて、死するまで其罪を悲み嘆かせ給ふた如く、私をも一日顧み給へ、私にも死するまで罪を悔み悲ませ給へ、主よ、私は何かなして、彼の悪黨輩が御身を凌辱めた丈け御身を崇め尊びたい、責めては、御身の爲に甘じて輕んぜられ、甘んじて辱められたい、たゞ主よ私に力を添へ給へ。

吾が頼なる御母マリアよ私の爲に耶蘇に祈り給へ

水曜日 耶蘇鞭たれ給ふ

(一) 猶太人等は夜の明くるを待ち兼ねて、
 耶蘇をピラトに引渡した、ピラトは耶蘇の無罪なのを覺りて、幾
 度も放免してやらうとしたけれども、猶太人等がナカ
 ナカに聽き容れさうでないのを見て、彼等を宥めんが爲
 に主を鞭撻の刑に處なつた。

そこで刑吏等は、早速主を裸体にして、石の柱に縛り
 付け、鞭を振つて主の周圍を取り巻いた、忽ち怖ろしい
 鞭の雨はヒウ〜と主の御身に降り注いだ、胸を打つも
 あれば、肩を打つもある、脇を打ち、腹を打ち、頭と云

はず、顔と云はず、手となく、足となく、所嫌はず打叩
 いた、傷は傷の上に加はり、皮破れ、肉飛び、骨露はれ、
 鮮血流れて川を成し、鞭も、柱も、庭も、刑吏も悉く唐
 紅と成り畢つた。

主よ、御身を鞭つた刑吏は實に斯私に外ならぬ、私が
 罪を犯す毎に御身を鞭つたのである、主よ私を憐み給へ
 あゝ私は何して自分の爲にかくまで鞭たれ給ふた御身に
 背いた！御身も亦何して私の如き忘恩奴の爲に甘んじて
 鞭たれ給ふた！サテも御身の憐の難有さよ、救させ給へ、

主よ、私はたゞ御傷に寄頼みて、罪の赦を偏に希ひ奉る。

(三)、パイジのマルガリタ、マリアに啓示された所によ

れば、刑吏等は六十人もあつて、入り替り立ち代り主を

鞭つたのである鞭もまた並大低のものでなく、一撃ごと

に皮断れ、肉劈け、血送り、主の御体は、頭の頂より足

の爪先まで、見るく爛れ破れ、麗はしかつた其容姿、

今は癩病者の如く、見る影もなき哀れな状態に成り果て

た、斯る姿を眺め觀たものなら、如何に鬼の様な猶太亞

人でも同情を催さずに居られまいとピラトも思つて、主

を彼等の前に引出して、「視よ斯人を！」と叫んだ位であ

つた。

あゝ主耶蘇よ、斯の驚くべき御慈愛！私は何を以て感

謝すること出来やう、思へば私は罪を犯す毎に刑吏等に

黨して御身を鞭つたのである、赦し給へ、主よ、赦し給

へ、斯くまで御身を苦めた彼の罪深き快樂を私は何より

も忌み嫌ひ奉る、今よりは、絶えず御身の愛を思ひ出し

て御身を愛し、決して再び御身に背くことなからしめ給

へ、既に御身の愛を十分に辨へ、幾度も御身の憐を経験

しながら、猶ほ罪を重ねて御身に背くやうでもあつたら、如何に怖ろしい地獄の罰を蒙りても足りないであらう、あゝ主よ、決して然る禍に遭はしめ給ふな、限なき善なる主よ、私は心の底より御身を愛し奉る、何時迄も何時迄も愛し奉るであらう。

(三)、抑も主が罪なき御身を、恚うまで酷く打碎かれ給ふたのは、私等の罪、殊に不浄、不潔の罪を償つて呉れる爲であつた。

主よ、罪を犯したのは私であるのに、罰は御身が受け

給ふか、肉体の快樂に耽つた私ころ、酷く罰さるべきであるのに、御身は却て自ら罰され、却て自ら鞭たれ給ふか：何と云ふ難有い御憐であらう、もし御身が私に代つて償つて下さらなかつたら、私は今何處にあるであらう、斯る御憐の天主に何故私は背いた、然し是迄は罪を犯して、御身の愛を軽んじたにせよ、今は一心に御身を愛し奉る、御身を愛するものをば御身も愛し給へば、私は萬事に超えて御身を愛し奉る、願くは御身の愛を辱うするに堪ふる者とならしめ給へ、いかに愛すべき救主

よ、私をいよく御身に結びつけ給へ、愛の絆もて緊しく御身に繋ぎ止て、決して御身に離るゝを許し給ふな。主よ私はもう全く御身の所有である、御意の儘に取計らひ給へ、たゞ御身の愛を失ふを許し給ふな、たゞ一心に御身を愛するを得せしめ給へ。

吾が頼なる御母マリアよ私の爲に耶蘇に祈り給へ

木曜日 耶蘇茨を冠せられ給ふ

(一) 刑吏等は、打殺さん許りに主を鞭ちても尙ほ飽き足らず、悪魔に誘かされ、猶太人等に煽動てられ、

の憎むべき悪戯を計畫み出した、主が「吾ころ猶太亞の王である」と被仰つたのを思ひ出して、御躰には王の玉衣として襪褌の朱き袍を打被せ、御手には王の笏に象りて一本の葦を握らせ、刺恐ろしい茨を組合せ九冠を御頭に戴かせ、やがて葦を取つて御頭を打叩き、其鋭い刺を深く脳髓までも打込んだ、忽ち幾條の血の川は御頭より流れ下りて、目も、口も、頬も、頭髮も、眞紅に染まつた、其苦さ果して如何ばかりであつたらう。

抑も主が御頭に、斯る怖ろしき苦痛を受けられたのは、

私等わたしらが汚けがらははしき思おもひ、淫奔みたらな望のぞみを起おこしたからでもあら
う、主しゅをば自分じぶんの王わうと認めみとめず、主しゅの支配しはいの下したに居おるを喜よろこ
ばず、主しゅの命令めいれいに従したがふを望のぞまなかつたからでもあらう。
主しゅよ赦ゆるし給たまへ、御身おんみは天地てんちの大王だいわうに在ましましながら、私わたしを
愛あいして、凌辱はづかしめの君きみ、苦痛くるしみの王わうとなつて下くださつた、斯かく迄まで
主しゅの愛あいを辱かたじけなうしながら、何どうして私わたしは御身おんみを愛あいしないで居ゐ
られやう、主しゅよ私わたしは御身おんみを愛あいし奉たてまつる、もう以後これからは決けつして
罪つみも犯おがすまい、御身おんみにも背そむくまいけれども、息いきの根ねの通かよ
つて居ゐる間は、何時いつ復た御身おんみを打う棄すて、御身おんみの愛あいを拒こはま

んども計はかり難がたいのである……主しゅよ、決けつして然さう云いふ禍わざはひを
許ゆるし給たまふな、御身おんみに背そむかんよりは、寧むじろ今いま潔きよく御前おんまへに死し
なしめ給たまへ。
(二) 刑人せめびと等は、主しゅに茨いばらを冠かむらせ、打連うちつれだちて主しゅの前に
跪ひざまづき、「猶太ユデアの王わう萬まん歳さい」と嘲笑あざけひ、御顔おんかほに唾つばし、頬ほを撲たぐ
り、様々さまざまに侮あなづり辱はづかしめた。
あゝ主しゅ耶蘇イエズスよ、今いまや御躰みからだは一面いちめんに傷やと血ちばかりで、御
心こころには、憂苦うれひ、悲哀かなしみ、悶絶もだへが一時いちじに揉もみ合あひ、もつれ合あ
つて居ゐるのである、限かぎりなき御慈愛おんいつくしみの主しゅでなければ、何人たれ

か私見たやうな卑しい罪人の爲に、斯る苦痛、凌辱を耐へ忍んで呉れる者があらう、御身は實に有ゆる罵詈、嘲弄、凌辱を浴びせられ、エルザレムの町中に生耻を曝させ給ふた、之を觀ながら、何人だつて御身を愛しないで居られやう？、主よ、私は御身を愛し、一身を御身に獻げ奉る、血も生命も悉く御身に獻げ奉る、御身は貴き御血さへ、二どなき御生命さへ、惜氣もなく私に與へて下さつたのに、私は何して何一つでも御身に謝絶することの出來やう、私は憐なる罪人であるが、心の底より御身を

愛して、吾身を残らず御身に獻げ奉る。

(三)

ピラトは、主の目も當てられぬ憐な状態を見て、如何に情を知らぬ猶太人とは云へ、是れでは同情の念を起さずに居られまいと思つて、主を彼等の前に引出し、「視よ斯人を！」と曰つた、「猶太亞の王になられては一大事と汝等が怖れて、私に引渡した斯人を視よ、はや何の怖るべき所がある、猶太亞の王ごころか、生命さへ覺束ない位である、早く宅へ歸へして死なしては如何ぢや」と云ふ意味であつた、然るに鬼のやうな猶太亞人等は、

斯態を見ても一向平氣なもので、可哀相にも思ふもの
てはなく、却て「十字架に掛けよ、十字架に掛けよ」と
聲を揃へて叫ぶものばかりであつた。

ピラトが猶太人に向つて「視よ斯人を！」と曰つた
時、天主も亦天より私等に向つて叫ばれた、「視よ斯人を
！世の初より汝等に約束し、汝等も亦埃ち焦れて居た救
主は斯人であるぞ、是れ實に吾が獨子、吾が何よりも愛
する獨子であるぞ、斯る苦しい目に遭はされて居るのは、
唯だ汝等を救はんが爲でないか、汝等よく之を眺め

觀て之を愛せよ」と。

あゝ天主、私は御子の痛々しい姿を仰視て一心に愛し
奉る、願くは其御苦痛に對して私の罪を赦し給へ、御子
の貴き御血が私の上に注がれたのを思ひ、私に憐を垂れ
給へ、主よ、私は御身に背いたことを悔み悲み、一心に
御身を愛し奉る、御身は私の弱いのを知り給へば、私を
憐み給へ、私を扶け給へ。

吾が頼なる御母マリアよ、私の爲に耶蘇に祈り給へ。

金曜日 耶蘇十字架を擔ひ給ふ

(一) ピラトは再三耶蘇の無罪を主張つて、之を放免してやらうとしたが、猶太亞人等より、「耶蘇を放免したら、皇帝陛下の忠臣でないぞよ」と嚇かされて、悪いとは知りながら、耶蘇に對して死刑の宣告を下して、彼等の手に引渡した：サテ、御身は何の悪事を爲したればとて、斯る怖ろしき刑に定められ給ふぞ、御身の罪と云ふは、他ではない、餘りに人々を愛し給ふたからである、御身に死刑を宣告したのは、ピラトではなく、實に此驚くべき愛であつた。

是に於て不正なる宣告文は、聲高らかに讀み上げられた、主は頭を垂れて之を聽き、謹んで御父の思召に身を托せ、其聖旨のまに、十字架に磔けられて、以て人々の罪を贖つてやらうとし給ふのである。

あゝ主耶蘇よ、御身は罪一つないのに、私に代りて死なうとして下さる、私は罪深い悪人であれば、御身の望み給ふ時、望み給ふ儘に死なしめ給へ。

(二) 既に死刑の宣告が下ると、長い大きな十字架は、主の御肩に打掛けられた、主は取る手も遅しと之を抱き

しめ、「三十三年の間、埃も焦れたる吾が十字架よ、汝に
磔けられて、人に吾が愛を示すべき時は今を來た」とて、
破れ爛れたる御肩も厭はず之を擔ひ、勇みに勇んで、カ
ルワリオ指して登り行き給ふ。

あゝ主耶蘇よ、御身は私の愛を得んが爲に、殆んど全
能の力を傾け盡し給ふ、まだ是上にも爲し得なさる事が
あるであらうか、たとひ卑しい奴隷風情の者でも、私に
代つて死にたいと曰つて呉れたら、私は如何に其奴隷を
愛するであらう、然るに今や天地萬物の大君が、私を活

かさんが爲に、自分が態々死んで下さつたのを見ながら、
どうして今日迄も之を愛せず居たのである、あゝ限な
き御慈愛の天主よ、私は御身を愛し奉る、御身を愛する
よりして、御身に背いたことを何よりも悔み悲み奉る。

(三) 主は自ら重い十字架を擔つて、ピラトの館を出で、
カルワリオの山へと進まれる…あゝ天地の大王が、數な
らぬ人間の爲に十字架に磔けられて死なうとし給ふので
あるぞ……汝謹んで、主が刑場に曳かれ行き給ふ有様を
仰ぎ視よ、全身傷き破れて生血を瀉らし、額には怖しい

茨を冠ふり、肩には重い十字架を擔ひ、頭は前にうな垂れ、膝はわななく震ひ、足はよろよくとして、一步々々仆れんばかりに、險しき坂路を辿り給ふ。

主よ、私は斯くまで御身に愛されながら、どうして御身の愛を忘れて、御身を愛しやうともしなかつたのである、愛しないのみか、却て罪に罪を重ねて、如何程御身の聖心を苦め、御身の十字架を重くしたか知れぬ、主よ、私は深く罪を悔み悲み、一心に御身を愛し奉る、唯御身をのみ愛し奉る、願くは絶えず御身の愛を憶ひ起して、

生涯忘れざらしめ給へ。

御身は一點の罪の汚もないのに、十字架を擔つてカル

ワリオの山へと進まれる、私一人どうして御身の後に従はずに居られやう、主よ、進み給へ、私は喜んで御身に從ひ奉る、如何なる十字架でも與へ給へ、私は其を擔つて、死する迄御身に從ひ奉る、御身は私の爲に死んで下さつた、私も御身と共に死にたい、御身を愛せよとは御身の命であるが、御身を愛するのは、私の一生の願である、私を扶け給へ、御身を一心に愛せしめ給へ。

吾が頼なる御母マリアよ、私の爲に耶蘇に祈り給へ。

土曜日 耶蘇十字架の上に死し給ふ

一一 耶蘇カルワリオ山の頂に着き給へば、刑吏等は直様りの御衣を剥ぎ取りて、十字架の上に推し付し、尊き御手足を大きな鉄釘で打つけた、是に於て主の肉は裂け、其骨は碎け、血は瀧の如く流れ降つた、其御苦痛果して如何ばかりであつたらう。

然し十字架の上での御苦痛には、到底々々比ぶべくもないのである、頭の頂より足の爪先まで、全身痛み給は

ぬ所とてはなく、其痛を撫でさすつて、幾分和げやうと思つても、手足は緊しく十字架に釘附けられて、少しも動かすことも出来ない、三時間の久しき、露程の休息も、慰安も得られぬのであつた、躰の重量を手に凭しても、足に支へても、手足は其重さに堪へずして、肉破れ、筋断れ、傷口擴がる、頭を擡ぐれば、茨の冠が十字架に突き當つて、新に打込まれる心地がする、さらばとて前に傾けると、死なん許りに嘆いて居なさる御母の姿が眼に止まつて、却て腸も断れる様に覺ゆる、加之、父の天主

よりは見捨てられ、悪黨輩よりは、有りと有ゆる悪罵、冷嘲の語を雨らされ、今は天にも地にも身の措き所もなき悲しい有様である。

主よ、私は今謹んで御身に近き、彼のマリア、マダレナと共に、御身の十字架を掻き抱き奉る、願くは玉体より滴り落ちる御血の一雫を以て、私の罪を洗ひ清め、私の心に主の愛の火を燃やし給へ。

抑も御身に隙間もなく負はされ給ふた御傷は、皆な是れ私の罪の業である、鞭にまれ、茨にまれ、十字架にま

れ、鍔と云はず、釘と云はず、皆な是れ私の罪科がかり集めたる責道具である、私は今この數限なき御傷を面に視、この見るさへ恐ろしき責道具を熟々眺めて、罪の如何に憎むべく、怖るべきかを悟り奉る…あゝ鞭よ、茨よ、釘よ、十字架よ、主を斯くまで酷い目に遭はせたる責道具よ、來つて私の心を傷け、絶えず罪を悔み悲しましてよ、然り、主よ、私は罪を犯して御身を苦めたのを、返すくも口惜しがり、心の底より悔み悲み奉る。

(二) 主は終に「萬事了つた」と叫んで、御生命を父の天

主に献げられた、あゝ主は終に果てられた、私を活かして呉れるが爲に、御自分の生命を捐てられた……見よ汝、仰いで十字架の上の耶穌を視よ、是れ實に天主の最愛の御獨子であるぞ、是れ實に汝の爲に犠牲となり給ふたのであるぞ、視よ汝を抱き締めんとて、兩腕は擴げて居なざるでないか、汝に和解の接吻を與へんとて、御頭はうなだれて居なざるでないか、汝を其聖心の内に庇へんとて、御脇は開いて居なざるでないか、斯くまで仁愛あつて、天主を、さうして汝は愛しないのである。

主よ、御身は終に死に給ふた、極めて耻かしき、極めて痛ましき刑に處はれて死に給ふた、是れ何の爲であつた、たゞ私に愛される爲でなかつたらうか、けれども、卑しい、罪深い私が、たとひ如何はと御身を愛したからとて、御身の愛の萬一でも報ずること出来ないのは御承知なかつたのであらうか……あゝ吾が心の愛にて在す耶穌よ、私は決して御身を忘れまい、御身が此拙い私の爲に十字架に磔られて、死んで下さつたのを見ながら、さうして御身の外に一物たりとも愛すること出来やう、さう

して力の限を盡して、御身を愛しないで居られやう。

(三) 斯くて耶穌の御死骸は十字架より下されて、御母

マリアに抱かれ給ふた、あゝ悲傷の御母よ、私にも近寄

つて其御死骸を拜むを許し給へ。おゝ汝罪人！近かう

來たれ、視よ此青褪めた御顔を、此沈んで居る御眼を、

此垂れ下つた御唇を、此打貫かれた御手足を、刺透され

た御脇を、其御躰に見ゆる程の傷跡を數へ見よ：是れ天

主の正義の怖るべき證據である、是れ罪愆の惡むべき証

據であるぞ、是れ耶穌の愛の驚くべき證據であるぞ。

如何に哀憐の御母マリアよ、私を憐み給へ、私の爲に斯

御子の御死骸を父の天主に獻げ給へ、其愛情の驚くべき

證據を數へ上げて、天主の正義を宥め、罪の赦免を乞ひ求

め給へ、御母よ、私を扶けて一心に御子を愛せしめ給へ。

吾が頼なる御母マリアよ、私の爲に耶穌に祈り給へ

耶穌の愛を求むる祈

十字架に磔けられ給ひし耶穌よ、吾れ爾を天主の御子

人類の贖主と崇め尊び、吾が爲に斯る慘酷やかなる死を

遂げ給ひし御芳志の程を深く謝し奉る、吾れ數々の罪を

重ねて爾に背きたりしも、今心の底より悔み悲み、以後は爾の外に何物たりとも愛すまじと決心し奉る、爾は「願へよ、然らば興へられん」と約束し給ひたれば、吾が願をも聽き容れ給へ、御苦難の功德によりて吾れに爾の愛を興へ給へ、願くは吾が心を全く爾に引取りて、今よりは力の有らん限り爾を愛し、後天堂に於て爾の聖き愛に酔ひつつ、千代に入千代に御榮を謳ふを得せしめ給へ。

附 録 終

吾家の紀念

父

死亡	婚姻	堅振		初聖體	洗禮		誕生	姓名
		名靈	日月		名靈	日月		
明治 年 月 日 降生	明治 年 月 日 降生		明治 年 月 日 降生	明治 年 月 日 降生		明治 年 月 日 降生	明治 年 月 日 降生	
								淋 毒